

日本英語学会
第 26 回大会資料・プログラム

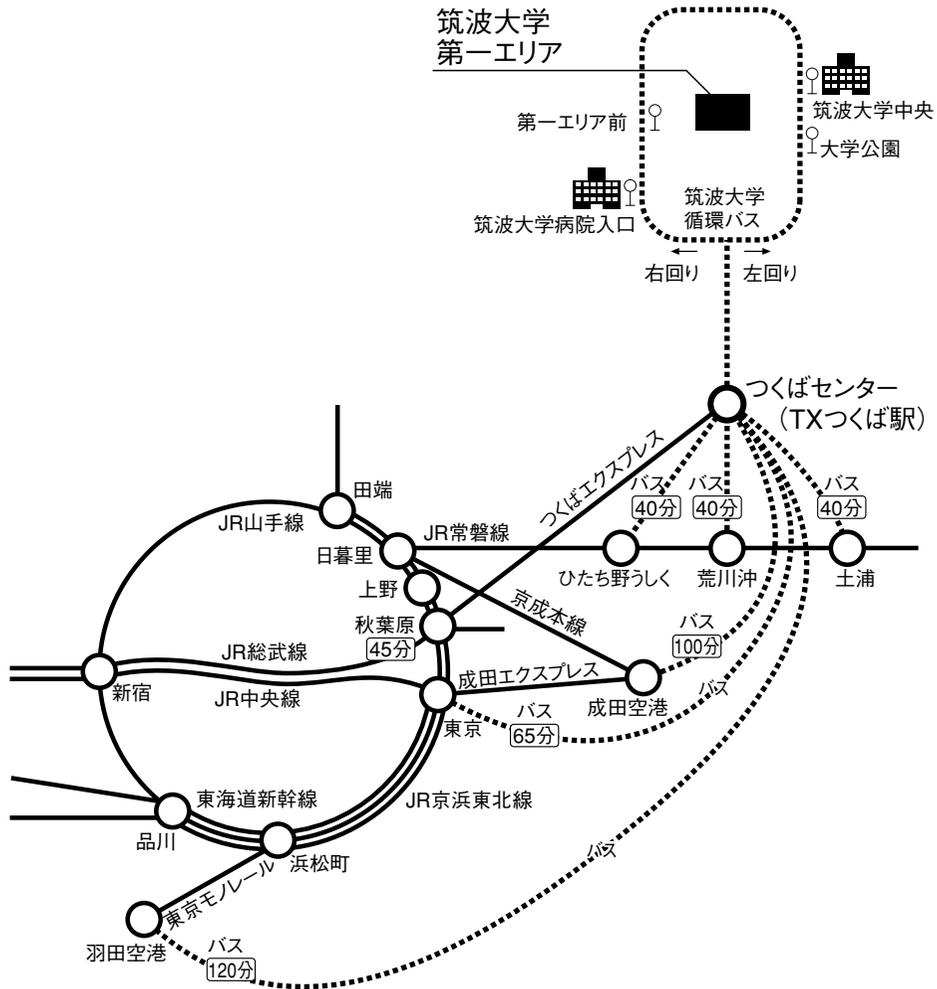
The Twenty-Sixth Conference
of
The English Linguistic Society
of Japan

2008 年
11 月 15 日（土）— 16 日（日）

筑波大学
(University of Tsukuba)
(〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1)

The English Linguistic Society of Japan

筑波大学キャンパスアクセスマップ



○つくばエクスプレス (TX)

秋葉原から終点「つくば」駅まで約50分。「つくば」駅から「筑波大学循環」または「筑波大学中央行き」のバスに乗り換えて、「第一エリア前」または「大学公園」まで約10分。

○JR常磐線

土浦駅、荒川沖駅、または、ひたち野うしく駅のいずれかで下車し、「筑波大学中央行き」または「つくばセンター行き」のバスに乗り換えて、「つくばセンター行き」の場合は、終点のつくばセンターで「筑波大学循環」または「筑波大学中央行き」のバスに乗り換え。

○高速バス

東京駅八重洲南口高速バスターミナル発の「つくばセンター行き」または「筑波大学行き」に乗り換えて、「つくばセンター行き」の場合は、終点のつくばセンターで「筑波大学循環」または「筑波大学中央行き」のバスに乗り換え。

○航空機利用

成田空港、羽田空港から電車を利用する以外に、つくばセンターまでの直通高速バスがあります。つくばセンターで「筑波大学循環」または「筑波大学中央行き」のバスに乗り換え。

なお、つくばセンターからタクシーを利用した場合、第一エリア (中央図書館前) まで、約5分約1200円で到着します。電車やバスの運行状況、時刻表については、筑波大学ホームページの「交通・キャンパスマップ」内の情報などを参照下さい。

第 26 回 大会 スケジュール

- 11 月 15 日 (土) 9:30 ~ 12:00 ワークショップ
9:30 ~ 12:00 スチューデント・ワークショップ
12:00 受付開始
12:50 ~ 13:35 総会
13:45 ~ 16:55 研究発表
17:40 ~ 19:40 会員懇親会 (第一エリア食堂)
- 11 月 16 日 (日) 8:50 受付開始
9:20 ~ 12:30 研究発表
13:45 ~ 16:30 シンポジウム

大会運営委員

田端敏幸 (委員長) 加賀信広 (副委員長)
井上逸兵 小野尚之 谷口一美 石川一久 奥 聡 武田修一
内堀朝子 岡崎正男 木口寛久 滝沢直宏 水口志乃扶

開催校委員

藤原保明 (代表) 小野塚裕視 竹沢幸一 柳田優子
島田雅晴 和田尚明 宮腰幸一 長野明子

開催校協力委員

野川健一郎 草山学 今野弘章

- 受付で大会参加費 2000 円と引き換えに、*Conference Handbook* と名札をお受け取り下さい。(非会員の方も参加できます。)
- 大会期間中 (15 日・16 日) は車でのご来場はできません。
- 以下の通り、昼食時に学内食堂がご利用になれます。
11 月 15 日 (土) 第二エリア食堂および第三エリア食堂
11 月 16 日 (日) 第一エリア食堂
- キャンパス (校舎内および通路) は禁煙です。会場でのトイレにつきましては、本冊子「会場案内図」や会場の掲示にて位置をお確かめのうえご利用下さい。
- 大会期間中に不測の事態が生じた場合は本部までご連絡をお願いいたします。
- 今大会の **Proceedings** である *JELS 26* の購入申し込みを大会受付にて承ります。
JELS は本大会会場でのみ購入の申し込みを受け付けることとなっておりますのでご注意ください。

会 場 案 内

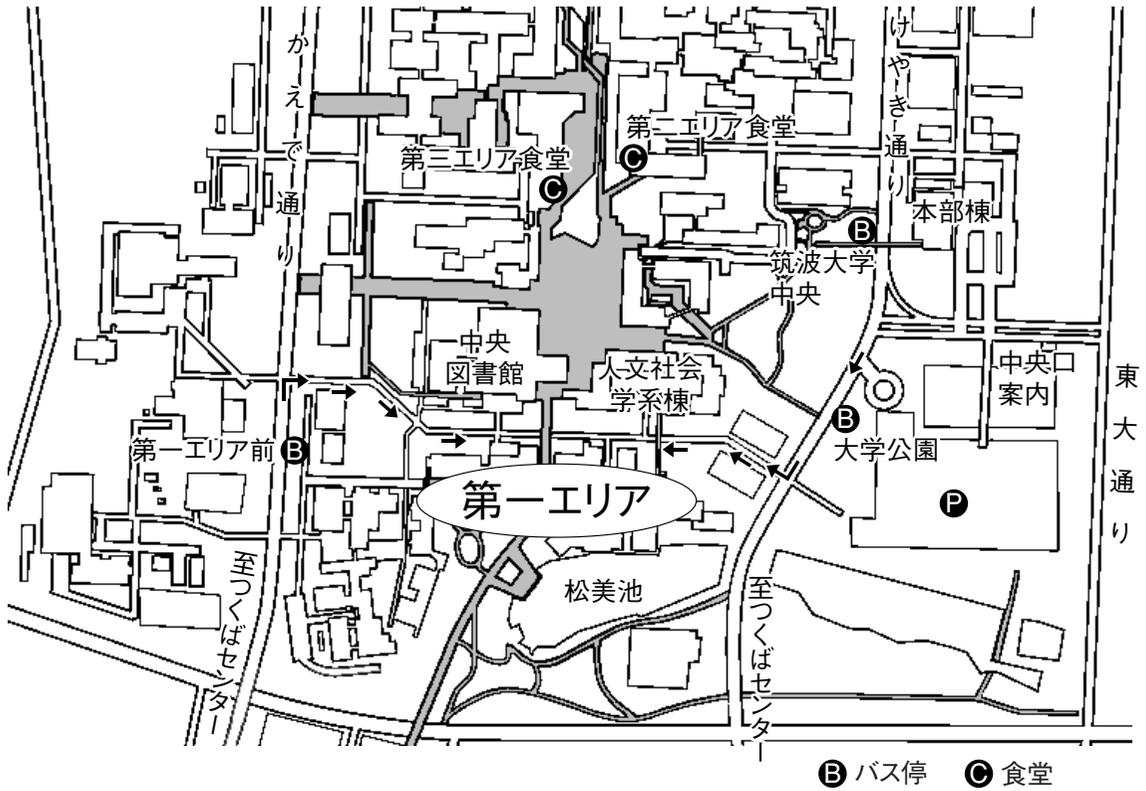
筑波大学（〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1 TEL: 029-853-2111（代））

受付	1C 棟	2 階フロア
本部	1C 棟	302 会議室
控室 開催校委員控室	1C 棟	303 会議室
司会者・発表者・講師控室	1C 棟	203 会議室
一般控室	1B 棟	203 講義室
書籍展示・販売	1B 棟	1 階、2 階、3 階フロア

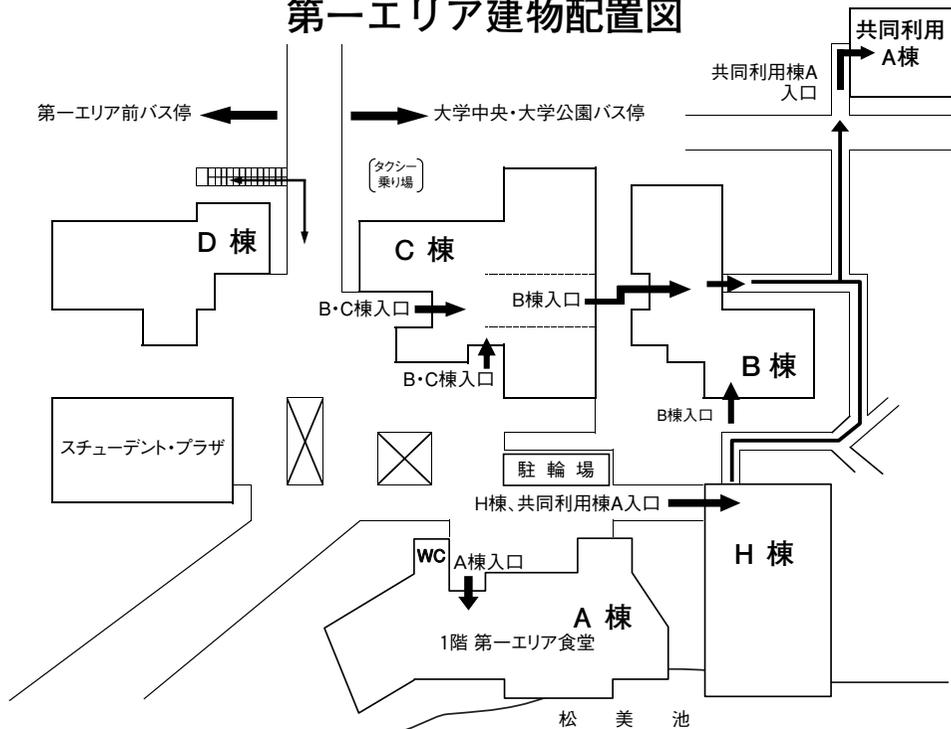
第 1 日午前	<ワークショップ> <スチューデント・ ワークショップ>	第 1 室	1C 棟	210 講義室
		第 2 室	1C 棟	310 講義室
		第 3 室	1B 棟	208 講義室
		第 4 室	1B 棟	308 講義室
		第 5 室	共同利用棟 A	101 講義室
		第 6 室	共同利用棟 A	201 講義室
第 1 日午後	<研究発表>	第一室	1H 棟	101 講義室
		第二室	1H 棟	201 講義室
		第三室	1C 棟	210 講義室
		第四室	共同利用棟 A	101 講義室
第 2 日午前	<研究発表>	第五室	1H 棟	101 講義室
		第六室	1H 棟	201 講義室
		第七室	1C 棟	210 講義室
		第八室	共同利用棟 A	101 講義室
第 2 日午後	<シンポジウム>	A 室	1H 棟	101 講義室
		B 室	1H 棟	201 講義室
		C 室	1C 棟	210 講義室
		D 室	1C 棟	310 講義室
		E 室	共同利用棟 A	101 講義室
		F 室	共同利用棟 A	201 講義室

総会	11 月 15 日(土)	12:50~13:35	1H 棟	201 講義室
会員懇親会	11 月 15 日(土)	17:40~19:40	第一エリア食堂 (A 棟 1 階)	
<会費>4,000 円 (学生 3,000 円)				

筑波大学キャンパス案内図



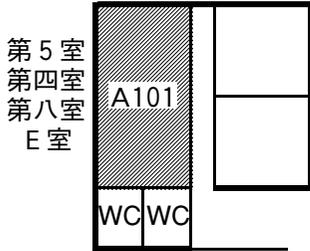
第一エリア建物配置図



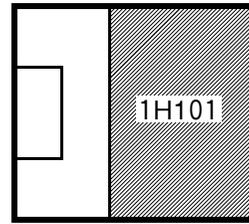
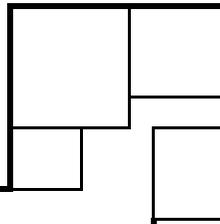
会場案内図

1階

共同利用棟A



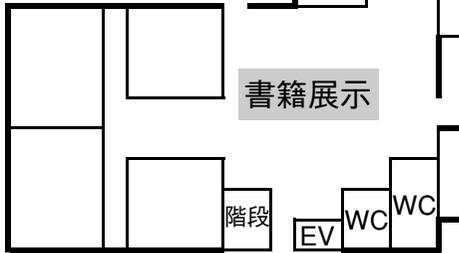
B棟



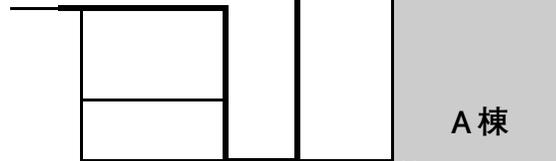
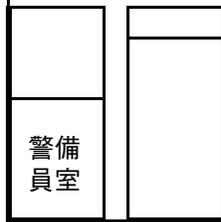
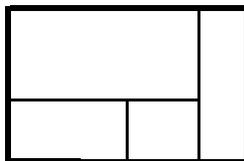
第一室
第五室
A室

H棟

書籍展示

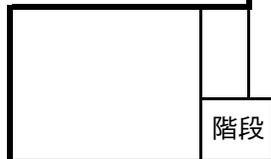


C棟



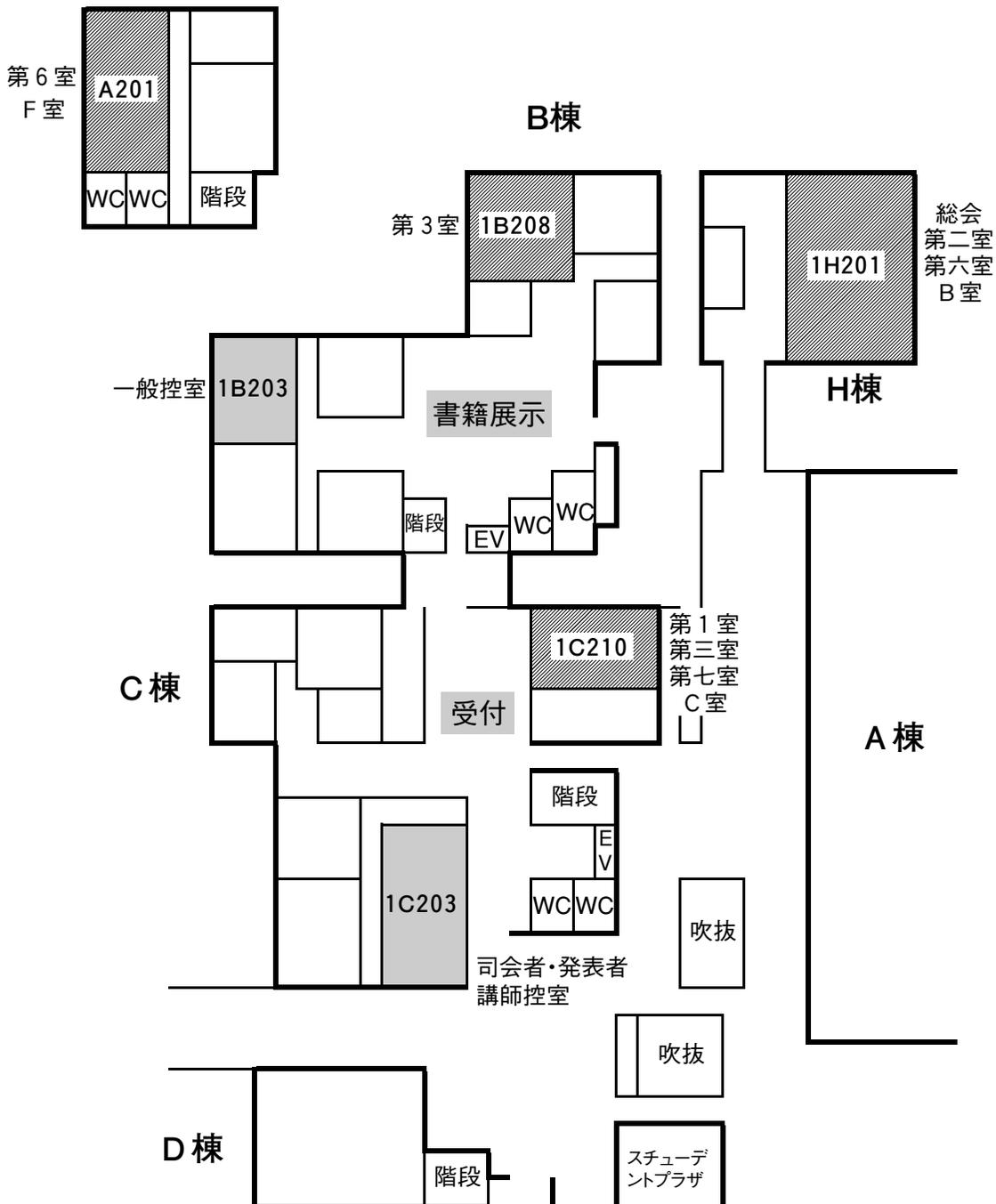
懇親会

D棟

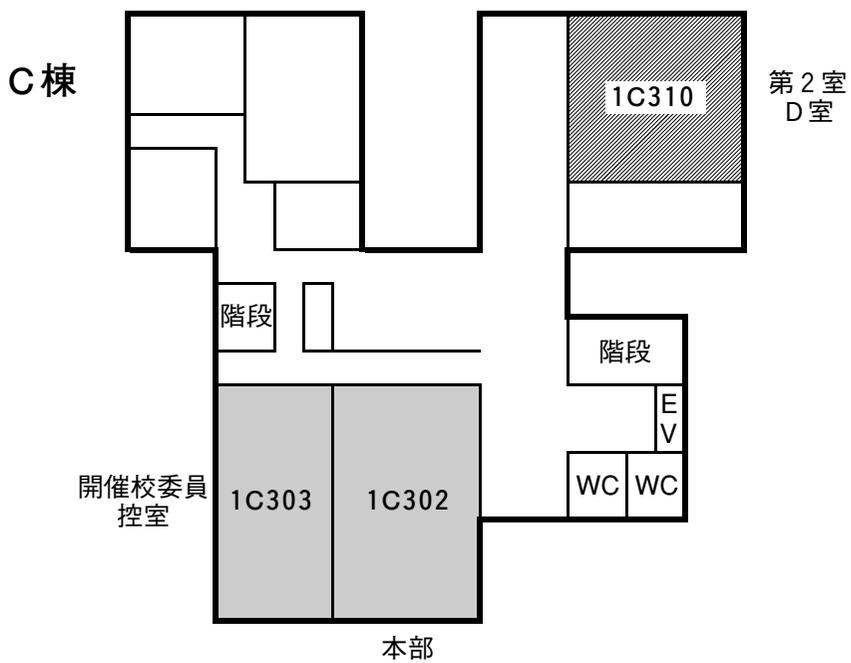
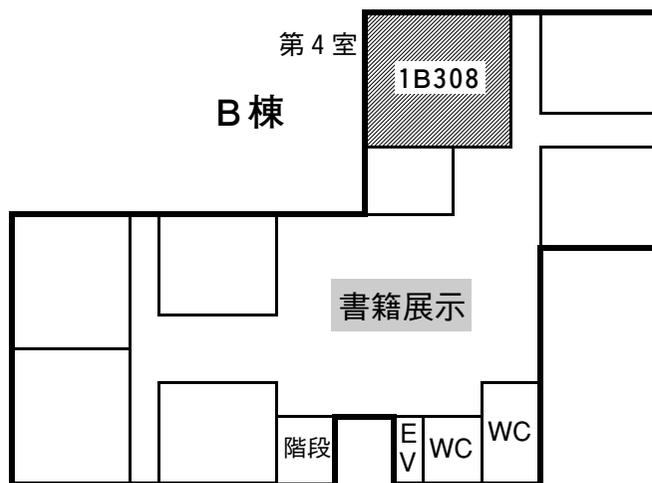


2階

共同利用棟A



3階



第 26 回 大会 プログラム

日本英語学会

第 1 日 11 月 15 日 (土)

ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 1 室 コーパス解析、作例、実験・調査を組み合わせた実証的言語研究法：日英語の清掃動詞構文の分析を通じて (1C 棟 210 講義室)

企画者 黒田 航 (情報通信研究機構)

スチューデント・ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 2 室 動詞の意味と構文の関わりー動詞後続の位置で観察される諸現象を中心に (1C 棟 310 講義室)

企画者 北原 賢一 (筑波大学大学院)

第 3 室 ミニマリスト・プログラムにおける移動現象 (1B 棟 208 講義室)

企画者 後藤 亘 (東北学院大学大学院)

第 4 室 Eventivity：その言語学的発展 (lexicon・syntax・semantics) (1B 棟 308 講義室)

企画者 後藤さやか (関西学院大学大学院)

第 5 室 英語前置詞の体系化をめざして (共同利用棟 A101 講義室)

企画者 森田 省 (茨城県立医療大学非常勤特別職)

第 6 室 円滑なコミュニケーションのあり方ー日英韓ディスコース対照研究ー (共同利用棟 A201 講義室)

企画者 工藤 貴恵 (日本女子大学大学院)

このワークショップのプログラムは応募された企画書に基づくものです。
正式なタイトル、発表者については別紙のワークショップ・プログラムをご覧ください。

受 付 正午より (1C 棟 2 階フロア)

総 会 12 時 50 分より 13 時 35 分まで (1H 棟 201 講義室)

◇開会の辞 会 長 原口庄輔 (明海大学)

◇開催校代表挨拶 筑波大学副学長 工藤典雄

◇委員会・事務局報告

大会運営委員会報告

委 員 長 田端敏幸 (千葉大学)

編集委員会報告

委 員 長 今西典子 (東京大学)

事務局報告

事務局長 田中智之 (名古屋大学)

◇感謝状贈呈

会 長 原口庄輔 (明海大学)

研究発表 13時45分より16時55分まで

第一室

(1H棟101講義室)

司会 谷口一美 (大阪教育大学)

13:45 大澤 舞 (筑波大学大学院) 「異常受身の語用論的認可条件」

14:20 今野弘章 (高崎健康福祉大学) 「中間構文の『総称性』再考」

14:55~15:10 休憩

司会 滝沢直宏 (名古屋大学)

15:10 黒川尚彦 (大阪大学大学院) 「vice versa のコード化された意味とは何か？」

15:45 大谷直輝 (京都大学大学院) 「依存構造に現れる不変化詞 *aside* の構文的意味について」

16:20 堀江 薫 (東北大学) [招聘] ・森本 智 (東北大学大学院)
「日本人学習者の英語関係節習得：後置修飾の処理に必要な方策の解明とその教授法」

第二室

(1H棟201講義室)

司会 星 浩司 (慶應義塾大学)

13:45 靱江 静 (東洋大学) 「英語における場所句倒置構文の統語構造」

14:20 三村敬之 (東北大学大学院) “Presentational *There* and Locative Inversion Constructions as Remnant Movement to the Left Periphery”

14:55~15:10 休憩

司会 内堀朝子 (日本大学)

15:10 三上 傑 (筑波大学大学院) 「場所句倒置構文と Preposing around *Be* : T の EPP を満たす Topical XP」

15:45 谷川晋一 (筑波大学大学院) 「話題化と場所句倒置の Split 素性分析」

16:20 西原俊明 (長崎大学) 「*There* 受動文と非対格 *There* 受動文について」

第三室

(1C棟210講義室)

司会 石川一久 (愛知学院大学)

13:45 藤原保明 (筑波大学) 「中英語後期における形容詞の語尾 *-e* の機能について」

14:20 渡辺拓人 (大阪大学大学院) 「近代英語期における *be about to* の発達と文法化—*OED* の引用文をコーパスとして—」

14:55~15:10 休憩

司会 小野尚之 (東北大学)

15:10 出水孝典 (神戸学院大学) 「step と pass の経路表現」

15:45 長野明子 (筑波大学) 「英語の複合動詞の種類とその屈折特性について」

16:20 藤本滋之 (西南学院大学) 「主題関係に基づく結果構文の分析」

第四室

(共同利用棟A101講義室)

司会 長谷川 宏 (専修大学)

13:45 石川弓子 (大阪大学大学院) “Split Lexical Insertion Hypothesis: A Case Study of Secondary Predicates”

14:20 土屋知洋 (関西学院大学大学院) 「ZERO-*that* 補文と *that* 補文による意味の相違—願望動詞 *wish* と *hope* に焦点をあてて—」

14:55~15:10 休憩

- 司会 岡崎正男 (茨城大学)
- 15:10 坂本洋子 (獨協大学) “Phoneme and Mora Awareness by Japanese Five-Year-Old Children”
- 15:45 三間英樹 (神戸市外国語大学) “Exceptions or a Category: A Numerical Investigation of Classhood in English”
- 16:20 山田英二 (福岡大学) 「レキシコンにおける範疇選択と副次強勢配置について」

会員懇親会 17時40分より19時40分まで
第一エリア食堂 (A棟1階) 会費:4,000円 (学生3,000円)

第2日 11月16日 (日)

午 前

受付 8時50分より (1C棟2階フロア)

研究発表 9時20分より12時30分まで

第五室 (1H棟101講義室)

- 司会 井上逸兵 (慶應義塾大学)
- 9:20 志澤 剛 (筑波大学大学院) 「発話理由条件文:聞き手志向性から見た日英比較」
- 9:55 多々良直弘 (桜美林大学) 「新聞報道における英語と日本語のテキスト構造の比較」
- 10:30~10:45 休憩
- 司会 武田修一 (静岡県立大学)
- 10:45 小葉 哲哉 (筑波大学大学院) 「発話様態動詞の語彙的特性と that 節の振る舞い」
- 11:20 蒲地賢一郎 (鹿児島大学) “Epistemic Modality and Present Perfect”
- 11:55 柏野 健次 (大阪樟蔭女子大学) [招聘]
「if 節に見られる epistemic will」

第六室 (1H棟201講義室)

- 司会 奥 聡 (北海道大学)
- 9:20 秋山正宏 (愛媛大学) “Anaphora Interpretation in Comparatives”
- 9:55 今西祐介 (大阪大学大学院) “Two Types of Dative Subject Constructions in Japanese and MULTIPLE AGREE”
- 10:30~10:45 休憩
- 司会 加賀信広 (筑波大学)
- 10:45 田中公介 (九州大学大学院) 「フェイズ理論における外置構文の派生について」
- 11:20 水口 学 (獨協大学) “Derivational Syntax and the Adjunct Condition”
- 11:55 三好暢博 (旭川医科大学) “The EPP, Feature Inheritance, and Anti-Agreement”

第七室 (1C棟210講義室)

- 司会 村尾治彦 (熊本県立大学)
- 9:20 阿部明子 (津田塾大学大学院) 「Way 構文の派生と拡張」
- 9:55 岩崎宏之 (筑波大学大学院) 「前置詞句主語と指示性」

10:30～10:45 休憩

司会 嶋田裕司 (群馬県立女子大学)

10:45 森 貞 (福井工業高等専門学校) 「否定辞繰り上げ現象に関する認知言語学的考察」

11:20 井上朋子 (常葉学園大学) 「『に』との比較における to の文法化—前置詞から不定詞のマーカ—へ」

11:55 有光奈美 (東洋大学) 「存在の「無」と強意語について: “dead” を中心に」

第八室

(共同利用棟 A101 講義室)

司会 藤井友比呂 (大東文化大学)

9:20 中村太一 (東北大学大学院) 「制限関係節としての決定詞付き自由関係節」

9:55 竹腰 敦 (金城大学) 「疑問代名詞・関係代名詞 who の格変化への最適性理論的アプローチ」

10:30～10:45 休憩

司会 木口寛久 (宮城学院女子大学)

10:45 北田伸一 (東北大学大学院) “Two Types of Coordinate Structures”

11:20 田中拓郎 (日本大学 / University of Connecticut 大学院) “Indirect Quantification”

11:55 田中英理 (愛媛大学) 「非能格自動詞の他動詞用法について」

午 後

シンポジウム 13時45分より16時30分まで

A室 CALLによる英語音声学習への試み—デザイン・理論・実践を通して— (公開)

(1H棟 101 講義室)

司会 立石浩一 (神戸女学院大学)

講師 山田玲子 (ATR / 神戸大学) 「英語音声学習環境をデザインする」

講師 立石浩一 (神戸女学院大学) 「ATR CALL を利用した母音・流音の知覚訓練の結果と意義」

講師 田嶋圭一 (法政大学) 「外国語音声リズムの聞き取りと学習」

講師 伊庭 緑 (甲南大学) 「英語発音訓練ソフトの開発・研究・実践」

B室 レキシコンの構造化をめぐる: 意味場的視点から

(1H棟 201 講義室)

司会 米山三明 (成蹊大学)

講師 松本 曜 (神戸大学) 「反義性再考: 語の対立と概念的対立」

講師 岩田彩志 (大阪市立大学) 「動詞の意味はどのように文法に反映されるか? 構文分析と語彙テンプレート分析を巡って」

講師 松本マスミ (大阪教育大学) 「反語彙主義による動詞統語論」

講師 米山三明 (成蹊大学) 「移動と状態変化」

C室 談話と統語のインターフェイス

(1C棟 210 講義室)

司会 遠藤喜雄 (神田外語大学)

講師 遠藤喜雄 (神田外語大学) 「統語構造地図作成プロジェクトにおける談話情報」

- 講師 長谷川信子 (神田外語大学) 「CP 構造からみた主語と一致現象」
 講師 野田尚史 (大阪府立大学) 「日本語の談話と統語のインターフェイス」

D 室 英語構文研究：言語理論とコーパス (1C 棟 310 講義室)

- 司会 深谷輝彦 (相山女学園大学)
 講師 大室剛志 (名古屋大学) 「補部をとる副詞について：周辺部の分析に役立つ大規模コーパス」
 講師 都築雅子 (中京大学) 「動詞の語彙特性を探る：コーパスデータの量的分析より」
 講師 大名 力 (名古屋大学) 「カテゴリー形成、パターン認識と構文」
 講師 後藤一章 (大阪大学) 「構文研究と統計」
 ディスカッション 山梨 正明 (京都大学)
 ディスカッション 八木 克正 (関西学院大学)

E 室 アジアの英語受容－現状と展望 (共同利用棟 A101 講義室)

- 司会 奥聡一郎 (関東学院大学)
 講師 平賀優子 (慶應義塾大学) 「日本における英語受容」
 講師 吉川 寛 (中京大学) 「韓国における英語受容」
 講師 河原俊昭 (京都光華女子大学) 「シンガポール・フィリピンにおける英語受容」
 講師 斎藤兆史 (東京大学) 「日本人と英語」

F 室 機能範疇の創発－通言語的視点から (共同利用棟 A201 講義室)

- 司会 大沢ふよう (法政大学)
 講師 大沢ふよう (法政大学) 「英語史における機能範疇の創発一言語における個体発生と系統発生」
 講師 酒井 弘 (広島大学) 「機能範疇パラメータ化再考」
 講師 保阪靖人 (首都大学東京) 「ドイツ語における機能範疇について」
 講師 保坂道雄 (日本大学) 「機能範疇はなぜ創発したか」

発 表 要 旨

〈研究発表〉第一室 (11月15日午後)

司会 谷口一美 (大阪教育大学)

「異常受身の語用論的認可条件」

大澤 舞 (筑波大学大学院)

本発表では、付加詞である前置詞句の内部から受身化が起こっている「異常受身」(The city was fought many battles over. (Kageyama and Ura (2002[1])))を扱う。まず、Davison (1980) や高見 (1995[2])、Kageyama and Ura (2002) といった先行研究が提案する当該構文の語用論的・意味的生起条件が、事実を適切に説明するには不十分であることを指摘する。この問題点を解決するため、「異常受身が認可されるには、受身文一般に関わる Bolinger (1975)の被影響性の制約を満たし、かつ、主語が文のトピックになるような文脈が必要である」という語用論的認可条件を提案し、その妥当性を示す。さらに、当該認可条件が、大澤 (2008[3])が提案する非意図的な迂言的使役受身の認可条件と平行的であることを指摘し、両構文が、単独では容認されないが、当該条件を満たした場合にのみ認可されるという点で、同じ種類の構文であるということも論じる。

[1] “Peculiar Passives as Individual-level Predicates,” *Gengo Kenkyu* 122. [2] 『機能的構文論による日英語比較』。 [3] 「cause 使役受動文の語用論的生起条件」, *JELS* 25.

「中間構文の『総称性』再考」

今野弘章 (高崎健康福祉大学)

英語の中間構文は、主語の恒常的な特性を表す総称的な構文であり、特定の出来事を表さないとされている (Keyser & Roeper (1984))。だがその一方、中間構文が特定の出来事を表す場合があるという指摘もある (Iwata (1999[1]), Yoshimura & Taylor (2006[2]))。両観察は、中間構文に総

称タイプと出来事タイプの2種類があること、つまり、中間構文が「総称性」の観点からは意味的自然類を成さないことを示している。本発表の目的は、この一見矛盾するように思われる事実を統一的に捉えることである。具体的には、Kuroda (1972[3]) に倣い、categorical judgment とthetic judgment の区分を応用し、中間構文をcategorical 文と考えることで、総称タイプと出来事タイプの中間構文を意味的自然類として統一的に捉えられることを論じる。さらに、本発表の提案に基づけば、中間構文が示す(いくつかの)生産的・非生産的側面を原理的に説明できることも示す。

[1] “On the Status of an Implicit Argument in Middles,” *JL* 35. [2] “The Middle Construction as a Prototype Category,” *JCLA* 6. [3] “The Categorical and the Thetic Judgment,” *FL* 9.

司会 滝沢直宏 (名古屋大学)

「vice versa のコード化された意味とは何か？」

黒川尚彦 (大阪大学大学院)

vice versa は直前の内容の「逆」を表す。Fraser (1970[1])は vice versa を先行節の2つの要素が交替した代用表現と分析した。しかし(1)のような単純な例は説明できても(2)には適用できない。これに対し、Kay (1997[2])は交替する要素は語用論的に喚起される2つの参加者と分析した。しかし(3)で喚起される参加者を何と見なすべきだろうか。

- (1) Tom hit Mary and vice versa.
- (2) New Yorkers like Chicago, and vice versa.
- (3) In slimming, success tends to breed success and vice versa.

本発表では、(1)(2)のような連辞的逆関係の

例だけでなく従来扱われてこなかった(3)のような選択的逆関係の例に、関連性理論の立場から *vice versa* のコード化された意味を明らかにすることで包括的な説明を与える。

[1] “Vice Versa,” LI 1. [2] *Words and the Grammar of Context*, CSLI.

「依存構造に現れる不変化詞 *aside* の構文的意味について」

大谷直輝 (京都大学大学院)

本研究では、依存構造内に現れる不変化詞 *aside* を含む、以下の二構文を考察対象とする。(a) *Leaving justice aside, however, there are good pragmatic reasons for concern.* (b) *Politics aside, the Vietnam industry is a profitable one.* 不変化詞 *aside* は依存構造内に現れる時、「～以外に/～を除いて」という話者の心的態度を表し、談話内での機能を担う。本研究では、*BNC* から依存構造内に現れる *aside* の全 590 例を取り出し、統語・意味・談話レベルの様々な要素を考察することで、*aside* 構文の談話機能と、現在進行中の文法化を定量的に分析する。結果として、*aside* 構文は、文法化が進むに連れ、他の談話標識と同様のふるまいを示すようになり、(1)形式が固定化し、(2)主文の前に現れ、(3)出現頻度が高くなる点と、二種類の *aside* 構文の談話機能の違いは、元の意味を反映している点を確認した。

[1] Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd ed., CUP.

「日本人学習者の英語関係節習得：後置修飾の処理に必要な方策の解明とその教授法」

堀江 薫 (東北大学)

森本 智 (東北大学大学院)

日本の英語教育は、1980 年代以降、大いに改善されたが、日本人英語学習者にとって後置修飾の習得が困難であることは変わっていない(諏訪部他 (1980)、木村・金谷 (2006))。関係節は L1、L2 習得の両面から幅広く研究されてきたが、日本語などの

「前置修飾」と英語などの「後置修飾」の処理が要求する方略の本質的な違いに着目した研究はない。Tavacolian (1981) は英語を母語とする幼児が、Flynn (1989[1]) は日本人成人英語学習者が、関係節を含む文を等位節のように解釈することを観察し、前者は、この現象を「等位節分析(*Conjoined-Clause Analysis*)」と名づけた。本研究は、これらの観察に着目し、日本人英語学習者が、等位節分析を脱するためには、英語母語話者が関係節処理に利用する方略を習得することが必要かつ有効であることを、競合モデル (Bates & MacWhinney (1987)) の観点から論ずる。

[1] “Spanish, Japanese and Chinese Speakers’ Acquisition of English Relative Clauses,” *Bilingualism across the Lifespan*, ed. by Hyltenstam and Obler, CUP.

〈研究発表〉第二室 (11 月 15 日午後)

司会 星 浩司 (慶應義塾大学)

「英語における場所句倒置構文の統語構造」

靱江 静 (東洋大学)

本発表は場所句倒置構文と呼ばれる構文の統語構造について考察する。場所句倒置構文とは、場所を表す前置詞句 (場所句) が文頭に現れ、かつ主語と動詞の倒置が起こる構文である。その派生について従来さまざまな提案がなされてきたが、どの分析にも問題がある。

本発表の目的は、場所句倒置構文の統語構造と派生の仕方を明らかにすることである。まず、先行研究の問題点を議論する。次に、場所句が持つ談話上の特徴と統語上の特徴について議論する。最後に、機能上と統語上の両特徴を反映した、場所句倒置構文の統語構造と派生の仕方を主張し、これらは先行研究が抱える問題点を克服できることも議論する。これらの議論は、結果として Chomsky (2004[1], 2005[2]) で提案された *internal Merge* についての *assumptions* の一つである「談話に関連する

特徴を新たに生み出す場合、主要部 head は OCC 素性を持ち、internal Merge によって OCC 素性が check された場合、新しい解釈が確立される」ことを経験的に裏付けることになることも議論する。

- [1] “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond*, ed. by A. Belletti, OUP.
[2] “Three Factors in Language Design,” *LI* 36.

“Presentational *There* and Locative Inversion Constructions as Remnant Movement to the Left Periphery”

三村敬之（東北大学大学院）

本発表では、英語における提示的 *There* 構文と場所句倒置構文を取り上げ、両構文に見られる類似点と相違点をもとに、両構文に対し、従来の分析（中島（1996[1]）、Nishihara（1999[2]）などとは異なる残余移動を用いた左方移動分析を提案する。

具体的には Rizzi（1997[3]）が提案する Split CP Hypothesis を採用し、提示的 *There* 構文と場所句倒置構文は、ともに、名詞句の左方移動とその名詞句の痕跡を含む要素の残余移動によって派生されると提案する。さらに、両構文は、場所句倒置構文では、TP 指定部の位置を前置詞句が占めるが、提示的 *There* 構文では、その位置を虚辞の *There* が占めるという点と、場所句倒置構文では、前置詞句が統語部門において TP 指定部から Topic Phrase へと移動するのに対し、提示的 *There* 構文では、音韻部門において虚辞の *There* が Topic Phrase へと移動するという点についてのみ違いがあると分析する。

- [1] 「多重主語構文としての場所句倒置」.
[2] “On Locative Inversion and *There*-Construction.” [3] “The Fine Structure of the Left Periphery.”

司会 内堀朝子（日本大学）

「場所句倒置構文と Preposing around *Be* : T の EPP を満たす Topical XP」

三上 傑（筑波大学大学院）

英語において、T の持つ EPP 素性の要請

は、ある適切な要素の外的併合や内的併合（いわゆる移動）によって満たされるが、後者の場合では一般に、動詞と数の一致を起こす nominal XP が満たすとされる(cf. Miyagawa (2005[1])). しかしながら、その一般化に反し、場所句倒置構文や Preposing around *Be* では、動詞との数の一致を示さない要素が、T の EPP 素性の要請を満たすと考えられる証拠が指摘されている。

本発表では、これら両構文において、T の持つ EPP 素性の要請は、T と AGREE していない Topical XP の内的併合によって満たされると主張し、それが起こる特殊な環境を明らかにした上で、T が持つ EPP 素性の要請を満たす方法に関して、新たな一般化を提示する。また、本発表の分析を基にして、ある種の Predication を確立するために移動が起こるということを提案し、その妥当性を探る(cf. Rizzi (2006[2])).

- [1] “On the EPP.” [2] “On the Form of Chain: Criterial Positions and ECP Effects.”

「話題化と場所句倒置の Split 素性分析」

谷川晋一（筑波大学大学院）

話題化の先行研究では、話題要素が Topic 素性を持ち C の領域に A' 移動するという分析がよく用いられており、特に Radford (2004[1]) は、この素性を解釈可能素性とみなしている。また、場所句倒置の場所句が話題要素と類似した統語特性を持つという事実を考慮すれば、場所句も Topic 素性を持ち Spec-TP を経由して A' 移動するという分析ができる。本発表では、先行研究の本質は維持するものの、Chomsky (2000 [2]) の仮説に基づき、話題要素と場所句が解釈可能な Topic 素性に加え、解釈不可能な素性 (Op 素性) も持つという所謂 Split 素性分析を提案する。この分析は、単に理論的メカニズムとの整合性を追求するものではなく、先行研究が特別な規定なしには捉えられなかった場所句倒置の生起に関する事実を説明する上で有効であると論じる。また、話題要素や場所句が形成するある種の移動の島を理論的に説明する上でもこの分析が有益であることも示す。

[1] *Minimalist Syntax*, Cambridge. [2] “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step*, ed. by Rodger Martin et al. MIT Press.

「There 受動文と非対格 There 受動文 について」

西原俊明（長崎大学）

英語には、(1)に示す There 受動文が存在する。

(1) There were [_{NP} several large packages] placed on the table.

(1)における NP は、be 動詞に後続する位置、もしくは文末に生起しなければならない。Chomsky (1999)は、英語には V-DO 制約が存在し、この制約を回避するために PF において TH/EX 操作が適用され、問題の NP は be 動詞に後続する位置、もしくは文末の位置を占めるという分析を提案している。

この発表では、PF における操作ではなく、Syntax における左方移動 (TrP の指定辞の位置への移動) と Focus 解釈を導く有標規則が適用されて There 受動文が派生されることを明らかにする。また、非対格 There 受動文についても併せて考察する。

〈研究発表〉第三室 (11月15日午後)

司会 石川一久 (愛知学院大学)

「中英語後期における形容詞の語尾 -e の 機能について」

藤原保明 (筑波大学)

形容詞の屈折語尾は現在では完全に消失している。しかし、弱化と脱落の過程においては、たとえば中英語後期には、-e は複数性と弱変化・単数形の標識となっていたとされる。しかし、このような一般化は、個々の文献における -e の脱落と付加に関する事実を捉えるには十分なものとは言えない。一方、-e の脱落と付加は音声的・語彙的・統語的などの要因によって引き起こされたが、この要因を探る場合にも従来の一般化は有効に機能しているとは言えない。個別の文献におけるこれまでの -e の分析と考察は十分ではなかった可能性

がある。そこで本発表では、1400年頃の *Mandeville's Travels* を分析対象として、個々の形容詞の語尾 -e の有無、および形容詞が占める位置と語尾との関係を、有標・無標の観点から分析する。結果として、この文献の形容詞は語尾の特徴から3種類に区分されること、また、形容詞の前置・後置という区別にも有標性が関与していることを示す。

[1] Denison, David (1993) *English Historical Syntax*. [2] Minkova, Donka (1991) *The History of Final Vowels in English*. [3] Seymour, M.C. (1967) *Mandeville's Travels*.

「近代英語期における *be about to* の 発達と文法化

—OED の引用文をコーパスとして—

渡辺拓人 (大阪大学大学院)

現代英語において *be about to* は近接未来を示すマーカーとして用いられるが (例えば Peters (2004: 7[1])を参照)、その用法が確立した時期については主に2種類の意見に分かれる。ひとつは Mustanoja (1960: 354 [2])に代表される中英語からとする立場であり、もうひとつは OED (*about*, A10-11)に代表される近代英語からとする立場である。しかし、どちらの見解も十分なデータに基づくものではない。

本発表では16世紀以降の OED の引用文をコーパスとして用い、*be about to* の用法の変化をデータから明らかにする。検索して得られた全用例を(1)頻度;(2)不定詞部分の動詞の意味;(3)受動態の使用;(4)無生物主語の使用の4つの基準から分析し、*be about to* が近接未来のマーカーとして現代英語とほぼ同じ用法を確立したのは、少なくとも19世紀の初め頃以降であることを示す。

[1] *The Cambridge Guide to English Usage*. [2] *A Middle English Syntax*.

司会 小野尚之 (東北大学)

「step と pass の経路表現」

出水孝典 (神戸学院大学)

step は一歩という瞬時的移動を表し、Alex stepped {*to/into} the room. (Zwarts 2005[1])のような to, into に対する共起可能性の違いが見られる。そこから、into が始点と終点からなる瞬時的移動の経路を表すのに対して、to は中間部分を含む持続的移動の経路を表すというのが一般的な考え方となっている。興味深いことに、通過を表す pass も、to とは共起しない(*The train passed to the station.)。一方で、pass が into を取った実例(The train passed into the Harlem tunnel.)が見られる。

本発表の目的は、Levin と Rappaport Hovav が提唱してきた事象構造鋳型を一部精緻化し、近年彼女らが提唱している変化の尺度性という概念も取り入れつつ、Rappaport Hovav and Levin (2001[2])で提示された事象の同一認定という仕組みを manner verb である step のみならず result verb である pass にも適用し、上で見たような振舞の共通性を説明することである。

[1] “Prepositional Aspect and the Algebra of Paths,” *L&P* 28. [2] “An Event Structure Account of English Resultatives,” *Lg* 77.

「英語の複合動詞の種類とその屈折特性について」

長野明子 (筑波大学)

英語では、複合動詞を複合で作ることができないとされる ([1])。複合名詞や複合形容詞が文字通り語と語を連結して作られるのに対し、(いわゆる) 複合動詞 (例: *to joyride*) は、対応する複合名詞 (例: *a joyride*) から派生によって作られる。本発表では、この伝統的分析が屈折という点から支持されることを論じる。まず、複合動詞の屈折が「右側主要部の法則」からの予測に従わないという事実を示し、英語の複合動詞も一律に複合で作られるという近年の研究 ([2]) を反証する。次に、複合動詞の屈折特性 (例: *to joyride* は規則活用) が、その派生方法 (例: *to joyride* は転換で派生) と相関することを、語の内部構造、

特に主要部の役割に注目して示す。結論として、英語の複合動詞は単一の 카테고리ではなく、逆形成型、転換型、並列複合型の少なくとも三種類からなる、混合的なカテゴリであると主張する。

[1] Marchand, H. (1969) *The Categories and Types of Present-Day English Word Formation*, C. H. Beck. [2] Ackema, P. and A. Neeleman (2004) *Beyond Morphology*, OUP.

「主題関係に基づく結果構文の分析」

藤本滋之 (西南学院大学)

結果構文成立の条件を、加賀 (2001[1]) における「マクロな意味役割」の観点から考察する。結果の状態を<主題>と見なす分析と単一主題の原則を仮定することにより、高見・久野 (2002[2])で問題とされている *Because of the earthquake, *the old vase trembled into pieces* の非文法性と、Sir Oliver flashed a glance upon it, and *every tongue trembled into silence* の文法性が説明される。また、*Mr. Wrenn trembled into the door of the Nickelorion* のような、ものの移動を表す文は、結果構文とは区別されることになる。この区別は、ものの移動とその到達点を表す述語と、ものの状態変化を表す述語の関係について、後者を前者の比喩的な意味の拡張ではなく、主題関係の変化によって生じたものと仮定することにより可能となる。つまり、Hoekstra and Mulder (1990[3]) 等が主張するような語彙変化は、非対格動詞と能格動詞(影山(1996[4]))の間についても成り立つことになる。

[1] 『語の意味と意味役割』第Ⅱ部, 研究社. [2] 『日英語の自動詞構文』, 研究社. [3] “Unergatives as Copular Verbs,” *LR* 7. [4] 『動詞意味論』, くらしお.

〈研究発表〉第四室 (11月15日午後)

司会 長谷川 宏 (専修大学)

“Split Lexical Insertion Hypothesis: A Case Study of Secondary Predicates”

石川弓子 (大阪大学大学院)

This presentation aims to argue against the movement approach to multiple theta-role assignments and supports the Split Lexical Insertion (SLI) Hypothesis, which states that formal features and a categorial feature of DP can be inserted separately into two distinct theta-positions in English by investigating why resultative constructions based on unergative verbs require a fake reflexive object. I will propose that VP is a strong phase which blocks the SLI into vP and AP due to the lexical integrity, resulting in an insertion of a fake reflexive as a last resort. This proposal supports the argument that the ECM subject obligatorily undergoes the Object Shift (OS). If the OS did not occur, accusative Case assignment from v would violate the Phase Impenetrability Condition. Furthermore, I will show that the SLI Hypothesis provide an analysis of depictives without recourse to sideward movement.

[1] Agbayani, B. and M. Ochi (2007) “Split Lexical Insertion in Parasitic Gap Constructions,” LSA 2007. [2] Saito, M. (2001) “Movement and Θ -Roles: A Case Study with Resultatives,” *TCP* 2.

「ZERO-*that* 補文と *that* 補文による意味の相違—願望動詞 *wish* と *hope* に焦点をあてて」

土屋知洋 (関西学院大学大学院)

Bolinger (1972[1])をはじめ補文標識 *that* の有無と動詞の意味との関連性を問題にした研究がなされてきたが、未だに包括的に説明できる理論は見出されていない。本発表では、Hooper (1975[2])に見られる断定・非断定の意味概念を軸に、何らかの形で断定を介す動詞であれば THAT (*that* を従える型)・ZERO (*that* を従えない型)の両 FORM を取ることが可能で、非断定的動詞では ZERO 型を従えることができないことを *wish* と *hope* を取り上げ比較検討する。また大江 (1988[3])らの先行研究を踏まえ、各動詞がそれぞれの FORM をとる際に動詞の意味に違いが生じることを通時的検

証など多角面から論じる。結論として、THAT と ZERO の FORM の違いにより *wish* であれば客観 (反芻的) 断定と主観 (直観的) 断定の違いが、また *hope* では段階的ではあるが広義の要求である「期待する」と「(好ましく) 思う」との意味の相違が生じることを提案する。

[1] *That's That*. [2] “On Assertive Predicates,” *Syntax and Semantics*, ed. by Kimball. [3] 「非現実的願望を表す *wish* のあとの接続詞 *that* の出没」, 『英語語彙の諸相』.

司会 岡崎正男 (茨城大学)

“Phoneme and Mora Awareness by Japanese Five-Year-Old Children”

坂本洋子 (獨協大学)

The aim of this presentation is to investigate whether phoneme and mora awareness by Japanese-speaking children is affected by kana literacy. In the previous studies, it has been concerned with whether phonological awareness is developed by literacy or not. If phoneme and mora awareness by Japanese speakers is developed by kana literacy, Japanese children preliterate in the kana character are not aware of phonemes and morae, which is contradictory to the hypothesis of spoken word recognition suggested so far. To investigate phoneme and mora awareness by Japanese-speaking children, two experiments have been conducted using the substitution task. The results of the experiments show that phoneme and mora awareness by Japanese children develops without kana literacy, but that it can be facilitated by kana literacy. The results also show that Japanese children are aware of morae more easily than phonemes.

“Exceptions or a Category: A Numerical Investigation of Classhood in English”

三間英樹 (神戸市外国語大学)

In any categorization, there are always

exceptions. If they are too numerous, however, there is a possibility that they actually comprise a distinct subgroup in the lexicon. Thus, it is always a big question where to draw the line between simple exceptions and category-defining words.

It is proposed in Zamma (2005) that there are four major classes in the English lexicon as determined by two general properties of classhood: root attachability and the stress preservation effect. In this presentation, I will provide the results of an investigation of these properties for each suffix, which utilizes a dictionary with a considerable number of entries. The results provide guidance as to where to draw the boundary between exceptional words and category-defining words. This is descriptively important, as there has been no quantitative research of this kind to date.

[1] Zamma, H. (2005) "Four Classes in English Lexicon," paper presented at 13th Manchester Phonology Meeting.

「レキシコンにおける範疇選択と 副次強勢配置について」

山田英二 (福岡大学)

本発表では、英語の副次強勢配置に影響を及ぼす要因の一つとして、強勢規則とレキシコンの間に「範疇選択」という仕組みが介在する可能性を指摘する。まず Pater (2000[1]) の問題点を指摘した後、従来の理論とは異なる分析法を簡単に紹介する。次に、その分析法を支える様々な仕組みの一つに「範疇選択」という文法操作が存在する可能性を示す。本発表では、同一語形を持ちながら異なる範疇となる語の内、主要な範疇を「第一範疇」、副次的なそれを「第二範疇」と規定する。例えば、segment の場合、第一範疇は名詞 segment [1-0]、第二範疇は動詞 segment [0-1]となる。しかし、importation の場合は、名詞 import [1-0]も動詞 import [0-1]も共に第一範疇としてレキシコンに記載されていると考えられるため、語形成に送られる際に「範疇選択」が

なされる必要がある。その操作上の負荷が強勢計算に影響を与え、結果として、importation [2-3-1-0]という正しい強勢型が保証される。

[1] "Non-uniformity in English Secondary Stress: The Role of Ranked and Lexically Specific Constraints," *Phonology* 17, 237-274.

〈研究発表〉第五室 (11月16日午前)

司会 井上逸兵 (慶應義塾大学)

「発話理由条件文：聞き手志向性から見た 日英比較」

志澤 剛 (筑波大学大学院)

主節の発話に対する理由・前提を述べる条件節 (Sweetser (1990[1]), Declerck and Reed (2001[2]))では、日本語の場合、「言う」などの伝達行為を表す表現を補わなければ非文になるのに対し (*ご存じないなら、今東京駅です。 / ご存じないなら言いますが、今東京駅です。)、英語の場合は随意的である (If you don't know, we are now at Tokyo Station. / If you don't know, I tell you we are now at Tokyo Station.)。本発表では、この違いに関し、廣瀬 (1997[3])で論じられた「私的表現・公的表現」の区別に基づき、発話理由条件文は公的表現のマーカーであるという分析をした上で、次の2点を主張する。1) 日本語の発話理由条件文に伝達行為を明示しなければならないのは、日本語が本来的に非伝達的な性格を持つ為に、主節に表される発話が公的表現であることを示すためである。2) 英語の発話理由条件文に伝達行為を明示する必要がないのは、英語が本来的に伝達的な性格を持ち、かつメトニミーによる意味の拡張性に富むためである。

[1] *From Etymology to Pragmatics*, CUP.

[2] *Conditionals*, Mouton. [3] 「人を表すことばと照応」, 中右 (編) 『指示と照応と否定』, 研究社.

「新聞報道における英語と日本語の テキスト構造の比較」

多々良直弘 (桜美林大学)

新聞報道の構造を分析した研究としては Bell (1991[1], 1998[2]) が挙げられるが、Bell は Labov & Waletzky (1967) や Labov (1972) で論じられている英語の口頭による語りと新聞記事の構造を比較分析し、英語の新聞記事の構造的特徴を明らかにしている。メディア報道では客観的な事実が報道されていると考えられがちであるが、実際には文化的な価値観により情報が取捨選択され、伝達されているため、各言語における新聞記事というテキストの中で何が重要とされるのか、またどのような言語的手段によって表現されているのかなどの点で差異が観察される。本研究発表では Bell (1991, 1998) で分析されている英語の新聞記事と日本語の新聞記事の構造を比較検討し、各言語のテキスト構造の特徴を明らかにしていく。

[1] *The Language of News Media*, Blackwell.
[2] “The Discourse Structure of News Stories,”
Approaches to Media Discourse, Blackwell.

司会 武田修一 (静岡県立大学)

「発話様態動詞の語彙的特性と that 節の振る舞い」

小葉哲哉 (筑波大学大学院)

shout や whisper などの発話様態動詞は、発話動詞 say と同様に that 節を従えることができる。しかし前者の場合、その that 節は補文標識 that の省略や補文内要素の抜き出しを許さないなど、say の場合とは対照的な振る舞いを見せる事が統語論的研究において指摘されてきた (Francis whispered *(that) we should turn down the stereo./*What did John whisper that he lost? 桑原・松山 (2001[1])). しかし詳細に観察してみると、そうした振る舞いが容認されている事例が見られる。

本発表では、この相反する二つの事例を考察し、that 節の振る舞いが、動詞の表す「発話」と「様態」の意味的特性に基づく

ことを主張する。特に、動詞が表す様態が文脈上既知であるなど、語用論的要因によって「発話」に焦点が移ると、that 節の様々な現象の容認性に影響が及ぶ事を指摘する。また、直接話法形式との比較から、that 節と共起可能な動詞の語彙的特徴についても論じる。

[1] 『補文構造』。

“Epistemic Modality and Present Perfect”

蒲地賢一郎 (鹿児島大学)

本発表では特に認識的(epistemic)モダリティの副詞を含む文を扱う。次の前者の文はモダリティの副詞 surely を含み、後者はそれを含んでいない文で、両文とも容認可能な現在完了の形式の文である。Surely it has rained./It has rained. 一方、次の両文 (単純過去形の文) も上の二つの文と同様に、surely の有無が関わっているが、前者は容認性に関してすわりの悪い文であり、後者は容認可能であるとする。#Surely it rained./It rained. これら完了形/単純過去形の表わす意味論的な特徴は、Dowty (1979 [1]), Landman (1992[2])で言及されている進行形の表わす意味論的な特徴 (possible events/actual events) に関連していると考えられる。

[1] *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel. [2] “The Progressive,” *Natural Language Semantics*.

「if 節に見られる epistemic will」

柏野健次 (大阪樟蔭女子大学)

if 節には epistemic will は使えないと言われるが、これは if と will という2つの「法」同士が衝突するためである。つまり、if を用いて話し手の uncertainty という態度を表明しておきながら、一方で epistemic will を用いて話し手の予測を述べるのは明らかに矛盾するのである。逆に、will を if 節で使うためには、will に話し手ではなく話し手以外の人の予測という読みを与え、命題の一部としなければならない。本発表では、この問題を G. Leech (2004[1]: 64)の If you'll be alone at the New Year, just let us

know about it. → If you can predict now that you will be alone at the New Year, let us know about it now (or at least before the New Year). という書き換えの上位節に注目し「誰のどの時点での予測判断か」という観点から説明する。

[1] *Meaning and the English Verb* (3rd ed.).

〈研究発表〉第六室 (11月16日午前)

司会 奥 聡 (北海道大学)

“Anaphora Interpretation in Comparatives”

秋山正宏 (愛媛大学)

この発表は、英語の比較削除構文について、比較主要部 XP 内に再帰代名詞あるいは通常の代名詞が生起する例を中心に考察し、比較対象 XP が比較節内で [Spec, C] へ移動し、その後で削除されることを(再)確認する。より具体的には、比較主要部 XP 内に生起する再帰代名詞に関して、再構築を伴う sloppy 読みが可能であること、問題の再帰代名詞の解釈に削除に特有な平行性制約の効果がみられることを通して、比較節内で比較対象 XP の文字通りの削除が行われることを示す。また比較節内での比較対象 XP の [Spec, C] への移動に注目し、比較主要部 XP 内に生起する代名詞の sloppy 読みが不可能である事実を説明する。以上の分析は、比較削除に文字通りの削除が関与するものの、問題の削除が非有界的な元位置での削除でないことを改めて示す。

“Two Types of Dative Subject Constructions in Japanese and MULTIPLE AGREE”

今西祐介 (大阪大学大学院)

In this presentation I claim that dative subject constructions (DSC) in Japanese can be classified into two types in terms of Case pattern: (i) stative sentences with a potential suffix or a psych predicate, for instance, on the one hand, (ii) possessive sentences and

transitive spontaneous sentences on the other. To demonstrate the two types of DSC, I adopt the C-T-v-V amalgamate under MULTIPLE AGREE ([1], [2]), and propose that dative Case in DSC is assigned derivationally, as opposed to previous analyses including [3] wherein a dative subject is assigned inherent Case. My analysis provides an account of how the different behavior of the two types of DSC with regard to Case pattern can be accommodated under the mechanism adopted. It is also shown that my analysis has important consequences for Transitivity Restriction and ergative case system.

[1] Hiraiwa, Ken (2000) “On Nominative-Genitive Conversion,” *MITWPL* 39. [2] Hiraiwa, Ken (2001) “Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese,” *MITWPL* 40. [3] Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, OUP.

司会 加賀信広 (筑波大学)

「フェイズ理論における外置構文の派生について」

田中公介 (九州大学大学院)

Extraposition from NP(ExNP)構文に関して、従来の統語的右方移動分析(Baltin 1984 [1])とは異なり、Chomsky (2004[2], 2005[3]) は PF 削除分析を主張している。

- (1) a. [A review _] appeared of
Chomsky's book.
- b. We saw [a painting _] yesterday
of John.

本発表では、この分析は ExNP 構文の重要な文法的特性を説明できないことを明らかにし、それが統語派生によって形成されることを再主張する。具体的には Chomsky (2005[3])のフェイズ理論に基づき、端素性 (edge feature: EF)がその派生を司る統語分析を提案する。この分析の結果、ExNP 構文の文法的特性がうまく導出されることを示すと共に、フェイズ主要部の EF と統語構造との関連性について考察する。

[1] “Extraposition Rules and Discontinuous Constituents,” *LI* 15. [2] “Beyond Explanatory Adequacy,” ms., MIT. [3] “On Phases,” ms., MIT.

“Derivational Syntax and the Adjunct Condition”

水口 学 (獨協大学)

This presentation reconsiders the Adjunct Condition in the Minimalist Program and claims that Bare Phrase Structure (Merge) and feature checking via Agree can give a derivational solution to this condition. It is proposed that an adjunct, an independent computational domain, is separately Transferred upon its Merger iff it is computationally complete through feature checking, as a result of which it is rendered invisible for further computation and the extraction out of it is precluded for the failure of Agree. It is shown that the proposed analysis, along with lexical parameters, not only explains cross-linguistic variations with the Adjunct Condition; it also extends naturally to the Subject Condition, with CED effects being given a unified derivational account without government. It is argued that the proposed analysis endorses the Minimalist view of language and is better than other derivational explanations ([1], [2]).

[1] Nunes & Uriagereka (2000) “Cyclicity and Extraction Domains,” *Syntax* 3. [2] Stepanov (2007) “The End of CED?” *Syntax* 10.

“The EPP, Feature Inheritance, and Anti-Agreement”

三好暢博 (旭川医科大学)

Chomsky (2005[1]) “On Phases”における理論的展開の真髄は、閉じた計算領域における言語計算の起点となるのがフェイズ主要部であり、フェイズ主要部が導入される派生のステップが言語計算の効率を考える上で最も重要という考え方である。本稿の目的は、この考え方に基づき導入され

た Inheritance という観点から Anti-Agreement 現象 (cf. Ouhalla (1993[2])) を分析し、その理論的及び経験的帰結を探ることにある。具体的には、Anti-Agreement 現象は C から T への素性継承が行われなかった場合の派生を具現している可能性を指摘する。この指摘が正しければ、EPP は T に固有の素性ではなく Edge 素性の一種であるという Chomsky (2005: 23) の示唆に経験的支持を与えるものとなるであろう。

[1] “On Phases,” ms., MIT. [2] “Subject-Extraction, Negation and the Antiagreement Effect,” *NLLT* 11.

〈研究発表〉第七室 (11月16日午前)

司会 村尾治彦 (熊本県立大学)

「Way 構文の派生と拡張」

阿部明子 (津田塾大学大学院)

本発表の目的は、英語の Way 構文を統語的意味的特徴から 6 つのタイプに下位分類し、その言語事実を構文の派生と拡張という観点から説明することである。Way 構文を下位分類するという試みは、影山 (1997 [2]) や Omuro (2003[1]) にもみられる。影山では、Way 構文を語彙意味論の観点から 3 タイプに分け、それぞれの概念構造を提示している。また、Omuro は、動的文法理論 (Kajita 1977, 1997) に従い、動詞が認可する補部の種類の観点から Way 構文を 3 つに分類し、Way 構文が少しずつ派生していく分析をしている。本発表では Omuro の基本的考えをさらに発展させ、動詞が認可する補部の種類や、移動の有無など動詞本来の意味から、make タイプ、push タイプ、kick タイプ、inch タイプ、jump タイプ、belch タイプの 6 タイプに分類する。そして動的文法理論に基づき、最も典型的な make タイプから最も派生的な belch タイプへと拡張していく道筋を示す。

[1] “A Dynamic Approach to the *One’s Way*-Construction in English,” Kaitakusha. [2] 『語形成と概念構造』, 第 3 章, 研究社.

「前置詞句主語と指示性」

岩崎宏之（筑波大学大学院）

前置詞句が主語になる場合、その前置詞句がどのような意味概念を表しているかによって、文の容認性に差が生じることが観察されている(有村 (1987[1])). 本発表では、この観察に対して、指示性という概念に基づく意味的説明を提示する。次に、前置詞句主語と、いわゆる副詞的名詞句との比較を行い、様態を表す前置詞句を主語とする文に関しては、完全に容認されるわけではないとする話者がいる一方、様態を表す名詞句が副詞的に機能している例が比較の数多く存在することを指摘する。そして、副詞的名詞句の生起条件を特定性に還元する谷 (1996[2])の分析を踏まえて、それぞれの現象を説明する指示性及び特定性という2つの概念がそれぞれ異なるものであることを見る。最後に、その概念的相違の経験的帰結として、現象として前置詞句が主語になっているものを、真の前置詞句主語と省略表現としての擬似前置詞句主語とに区別できることを示す。

[1] 「前置詞句主語について」. [2] 「英語の副詞的名詞句について」.

司会 嶋田裕司（群馬県立女子大学）

「否定辞繰り上げ現象に関する 認知言語学的考察」

森 貞（福井工業高等専門学校）

Langacker (2004[1], 2008[2])によれば、本現象は、主節述語が Epistemic Control Cycle における inclination stage を記述する述語である場合にのみ見られる現象である。例えば、I don't think (that) p には『否定命題 (¬p) の緩和的な主張』を表す用法 (¬p への inclination) と p に対する『緩和的な否認』を表わす用法 (p に対する disinclination) があり、前者の用法の場合に、NR 解釈が活性化する。同様の用法は、'I'm not certain (that) p' 'I don't know that p' 等の表現にも内在しており、前者の用法の場合に、NR 解釈が活性化する。本発表では、本現象が、《当該表現の主節部分が inclination stage を

記述し、統語的複文構造が、主節の一部もしくは全部が modal 化/epistemic adverb 化することにより、その構造が解体され、概念構造上、単文として construe された場合に生じる現象》であることを論じる。

[1] "Aspects of the Grammar of Finite Clauses," *Language, Culture, and Mind*, CSLI.
[2] *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, OUP.

『に』との比較における to の文法化 —前置詞から不定詞のマーカーへ—

井上朋子（常葉学園大学）

英語における to は、空間的な移動の到着（目標）点を示す前置詞としてだけでなく、不定詞のマーカーとしても使われるが、歴史的な研究ではこの二つの to はつながりがあるとされている。この変化について、Haspelmath (1989[1])は「文法化」の一例として論じ、言語間に共通する現象であると述べている。

一方、日本語における「に」も、空間的な移動の到着点を表す格助詞としてだけでなく、移動の目的を示す動詞に続けて使われることがある（例：海へ写真を撮りに行った）が、後者のような「に」の扱いについては現在のところあまり多くの議論がなされておらず、解釈も一定していない。

本発表では、to と「に」の間には共通する動機づけに基づいた「方向→目的」という意味変化と「前（後）置詞+名詞→前（後）置詞+動詞」という文法的な変化があると仮定し、認知言語学的なアプローチにより考察を進めていく。

[1] "From Purposive to Infinitive: A Universal Path of Grammaticization," *Folia Linguistica Historica* 10.

「存在の「無」と強意語について： “dead” を中心に」

有光奈美（東洋大学）

強意語に関して多くの意味拡張の研究が行われてきている (Traugott 2006[1])。否定的価値を持つ副詞が強意語となることについては、Jing-Schmidt (2007[2]) などに説か

れている。本発表は、現代英語において、何故 *alive* ではなく *dead* が「全く、完全に」という *completeness* や *totality* を表わす強意語になりうるのかという疑問を解明しようと試みる。As sometimes in a dead man's face... / "That's right," said Charlie, "you're dead right." のような違いを照らしながら、*dead* は 生死という二項対立的な矛盾関係の対比 *contradictory opposition* に類し、生の終わり、すなわち生の対比の極限にある生命の完全な「無」であり、否定は肯定に対して有標 *marked* という特徴があるため、*daed* のような語が「完全さ」を表わす強意語となりうるのではないかという答えを提示する。

[1] "The Semantic Development of Scalar Focus Modifiers." [2] "Negativity Bias in Language: A Cognitive-Affective Model of Emotive Intensifiers."

〈研究発表〉第八室 (11月16日午前)

司会 藤井友比呂 (大東文化大学)

「制限関係節としての決定詞付き自由関係節」

中村太一 (東北大学大学院)

本発表では、(1)に示すこれまであまり扱われることのなかった関係節を分析する。

- (1) There's a collar and a *what they call a* <unclear>... (BNC)
- (2) I had myself independently discovered most of *what it contained*. (Kono (1984: 77))
- (3) *There is *what you bought* on the table. (ibid. 76)
- (4) There is a *chapter which discusses the letters from Germans* ... (BNC)

この関係節を、(2)に示す自由関係節(FR)との外形上の類似性から、「決定詞付き自由関係節」と呼ぶことにする。決定詞付き自由関係節は、(1)で定性効果をささないことから明らかなように、(3)に示す FR ではなく、(4)に示す制限関係節(RR)の特徴を持っている。この事実を踏まえ、決定詞付き自

由関係節は、RR と同じ派生により生成されると提案し、決定詞付き自由関係節が RR と一定の特徴を共有することを示す。

「疑問代名詞・関係代名詞 *who* の格変化への最適性理論的アプローチ」

竹腰 敦 (金城大学)

疑問代名詞・関係代名詞 *who/whom* の使い分けに関しては、3つの異なる文体が存在する (Lasnik and Sobin 2000[1])。第1の文体では、主語・目的語いずれの場合も *who* が用いられる。第2の文体では、主語の場合は *who* が用いられるが、前置された PP 内の目的語の場合は *whom* が用いられる。第3の文体では、主節主語以外の場合では *whom* が用いられる。興味深いのは、“We feed children *whom* we think are hungry.”のように、従属節主語の場合も *whom* が用いられることである。

本発表では、言語変異は普遍的制約の階層交替に起因するという最適性理論の仮定に基づいて、3つの文体間の相違を説明する。その中で、音韻論において提案された位置的忠実性 (*positional faithfulness*) という考え方が形態統語論においても必要であることを指摘する。

[1] "The *Who/Whom* Puzzle: On the Preservation of an Archaic Feature," *NLLT* 18.

司会 木口寛久 (宮城学院女子大学)

“Two Types of Coordinate Structures”

北田伸一 (東北大学大学院)

本発表では、二種類の等位構造を提案する。そして、これらの構造が併合という根源的操作の帰結として存在すると主張する。一つの等位構造は、二つの独立した要素から統語構造を構築する *External Merge* (Chomsky (1995))により派生される。これにより、非対称構造を持ち、等位項間に階層関係が生じる。もう一つの等位構造は、異なる併合操作が同一の要素を共有して統語構造を構築する *Parallel Merge* (Citko (2005))により派生される。この場合、対称構造を持ち、平板な内部構造になる。

この提案の帰結として、階層に言及して操作が適用される統語・LF 部門では、二種類の等位構造が異なる振る舞いを示すのに対して、規則が線形順序に基づいて適用される PF 部門では、二種類の等位構造が同一の振る舞いを示すと予測される。この予測を、抜き出し、解釈、一致の現象から検証する。

“Indirect Quantification”

田中拓郎（日本大学 / University of Connecticut 大学院）

数量子が遊離した位置に生起している「ジョンは本を{少し/たくさん/ほとんど/すべて}読んだ」という文は、(i)読んだ本の数量、(ii)一冊の本についてすでに読んだ分量、という多義的な量化の解釈がある。(ii)の読みにおける所謂 Incremental Theme の量化のシステムについては、Accomplishment verb を語彙分解し、動作を示す ACT、結果状態を示す BECOME に分ける分析が提案されている(Rothstein 2004)。一方、日本語の遊離数量子構文については、(i)非遊離と遊離のパターンは派生関係にない、(ii)遊離した数量子はイベント変項を束縛する副詞である、という分析が提案されている(Nakanishi 2004)。本論ではこれらの先行研究を組み合わせ、遊離数量子による Incremental Theme の量化は、(i) ACT イベントから BECOME イベントへの投射、(ii) イベント領域から個体領域への投射、という 2 段階の投射を経る間接的な量化によって行われる、と提案する。

[1] Nakanishi, Kimiko (2004) *Domains of Measurement*, Ph.D. Diss., UPenn. [2] Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*, Blackwell.

「非能格自動詞の他動詞用法について」

田中英理（愛媛大学）

本稿は、英語の非能格自動詞の他動詞用法(=i)が、適用態と類似した現象であり、内項が増えることによって形成されることを主張する。

(i) John walked Mary home.

(i)が使役外項の（自由な）増加によって形成されるという先行研究の主張(Levin & Rappaport Hovav (1995)、Brousseau & Ritter (1991))は、①この種の他動詞用法が移動様態動詞に限られること、②非対格自動詞の他動詞用法が表す意味と非能格自動詞の他動詞用法の表す意味が異なることを予測しない、という問題がある。通言語的には、非対格自動詞と非能格自動詞が同じ形態素によって項を増やす時、前者は使役態、後者は適用態の意味を持つ。本稿は、(i)がこれらの現象と同様に捉えることができることを主張する。具体的には、(i)が適用態と密接な意味関係にある「随伴使役」(Shibatani & Pardeshi (2002))を表わし、「随伴」を表わす機能範疇によって内項を導入すること、また、「随伴」の意味に限られることによって他の非能格自動詞が他動詞用法を持たないことを説明する。

[1] Levin & Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity*. [2] Shibatani & Pardeshi (2002) “The Causative Continuum.”

〈シンポジウム A 室〉（11 月 16 日午後）

CALL による英語音声学習への試み —デザイン・理論・実践を通して—

司会 立石浩一（神戸女学院大学）

英語学習環境のデザインにおいて、CALL 教材は今や欠かせないものとなっているが、ともすると、文法・読解・資格試験対策など、比較的「分かりやすい」ターゲットの物がよく使用され、言語というコミュニケーションメディアの根幹である音声の学習は、未だに非日本人教員あるいは一部の専門家任せという教育現場も多いのが現状であろう。

本シンポジウムでは、音声の知覚・産出の学習への CALL 教材での試みを、教材作成、利用、知覚実験、産出訓練という多角的な視野でとらえ、その意義、功罪を問うことにより、一方では英語教育現場における CALL 音声教材利用の一助となり、またもう一方では教育効果の基礎的・理論的考察の例示を行う。英語教育・音韻論・音声

学等多い分野のご参加、及びそれによる活
発な議論が展開されることを期待する。

「英語音声学習環境をデザインする」

講師 山田玲子 (ATR / 神戸大学)

音声言語は人間のコミュニケーション
を支える重要な機能を担う。日本語母語話
者を対象とした一連の英語音声学習実験
により、母語にない外国語の音韻は知覚・
学習が困難であるが、(1)音に着目した訓
練を行うことにより、成人でも新しい音韻
カテゴリーを形成できること、(2)知覚と生
成の間には関連があり、訓練効果が互いに
転移すること、(3)意味的文脈のみに頼った
学習は音韻知覚学習を阻害する場合があ
ること、(4)音韻の混同が単語の意味の混同
を引き起こしていること、(5)音韻知覚の能
力が音声単語の認知処理のボトルネック
となっていることなどが明らかになった。
これらの結果は第二言語の学習における
音声の重要性を示唆しているといえよう。
これらの知見の学習教材への応用や、音声
情報処理技術を取り入れた学習プログラ
ムをデモを交えて紹介し、様々なメディア
を利用した英語音声学習環境のデザイン
について考察する。

「ATR CALL を利用した母音・流音の 知覚訓練の結果と意義」

講師 立石浩一 (神戸女学院大学)

一般に、日本人はr/lの知覚及び産出、
また英語母音の知覚及び産出が、英語音声
の中でもことに苦手であると言われている。
共に原因は、日英両言語の音素体系の
違いであることには異論の余地は無い。

そこで、本シンポジウムでは、筆者が行
った、大学生に対する、ATR CALL 教材
(ATR 人間情報通信研究所編[1])を利用した、
pretest、訓練、posttest、成果を検討するこ
とにより、この二種類の「困難な音声区別」
が同等に困難であるのかを検討する。

その結果、母音は、特に英語レベルの低
い者と高い者において、訓練試行回数に応
じた伸長が見られたのに対して、r/lは、
英語レベルの低い者にのみ、初期効果だけ

が得られた。この事実を、音声体系の範疇
化との関わりから、精査していく。(本研
究は水口志乃扶 (神戸大学) との共同研究
である。)

[1]『完全版 英語リスニング科学的上達
法 音韻篇』、講談社。

「外国語音声リズムの聞き取りと学習」

講師 田嶋圭一 (法政大学)

言語にはその言語独特のリズム感があ
ると言われている。そのリズムを正確に聞
きとり産出することは、特に外国語でのオー
ラル・コミュニケーションを円滑に行う
ためには、個々の音素の聞きとり・産出と
同様に重要である。過去の研究から、適切
な知覚同定訓練を行えば、困難な外国語の
音韻対立の聞き取りが成人においても向
上することが示された[1]。筆者らはこのよ
うな訓練手法を外国語音声のリズムの学
習に適用しその効果を検証するための実
験的研究を行ってきた。本発表では、英語
リズムの単位とされる音節(シラブル)の
聞き取りに焦点を当て、(1)日本語話者は英
語の音節をどの程度正確に聞き取ってい
るか、(2)訓練により聞き取りがどの程度向
上するか、(3)音節の正確な聞き取りを妨害
する要因は何か、といった問題を取り上げ、
外国語学習にどのような示唆を与えるか
考察する。

[1] Lively, et al. (1994) "Training Japanese
Listeners to Identify English /r/ and /l/. III.
Long-term Retention of New Phonetic
Categories," *J. Acoust. Soc. Am.* 96.

「英語発音訓練ソフトの開発・研究・実践」

講師 伊庭 緑 (甲南大学)

英語の発音訓練ソフトウェアはすでに
数多く開発され、導入している教育機関も
多い。完成した既製品を使用するのもよい
が、枠組みだけ提供しコンテンツをカスタ
マイズできるソフトも存在する。自由度が
高いので教員は研究にも使用できるし、試
行錯誤しながらソフトを改善していくこ
ともできる。

本シンポジウムではこういった「小さな

ソフト」を使用した英語のプロソディの訓練の例と、それに付随する実験の結果を紹介する。実験は訓練の効果を計るための pretest に使用したモデル発音の学習者への影響について定量分析と主観評価を用いて調べたものである。結果として pretest で 1, 2 回モデル音を聞いた後の学習者の英語発音はプロソディに関してはモデル発音に近づく傾向が見られたが、母音・子音には影響が見られなかった。

また時間が許せば 2004 年に大学の支援を受けて開発したウェブサイト「英語発音入門」も紹介し、批判を仰ぎたい。

[1]「英語発音入門」

<http://kccn.konan-u.ac.jp/ilc/english/>

〈シンポジウム B 室〉(11 月 16 日午後)

レキシコンの構造化をめぐって：

意味場的視点から

司会 米山三明 (成蹊大学)

20 世紀の前半から半ばにかけて、ドイツ、フランスを中心にして意味場 (semantic field) という考え方に基づいた語彙に関する研究が盛んであった。これは一般に場の理論と呼ばれるもので、その基本的な考え方は、語の意味は語が相互関連的に集まって構成される場の中で規定されるというものであった。意味場の考え方はその後も形を変えて受け継がれ、今日の言語学の中に深く根付くことになった。

本シンポジウムは、レキシコンの構造化に関する問題について、今日的な意味場の視点から考えてみようというものである。意味場を構成するとされる系列的 (paradigmatic) な関係と統合的 (syntagmatic) な関係に光を当てながら、反義性、動詞の意味と構文/テンプレートの意味、レキシコンと統語構造、概念意味論から見た意味場等の問題について検討したいと考えている。認知言語学、生成文法どちらに関心のある方にとっても有益なシンポジウムになることを願っている。

「反義性再考：語の対立と概念的対立」

講師 松本 曜 (神戸大学)

意味場理論者の多くや構造意味論者は、意義関係 (sense relation) を語と語の関係として捉えた。これに対し認知意味論においては、意義関係を概念の世界における概念間の関係の言語的反映であると考え (cf. Fillmore & Atkins (1992[1])). 本発表では、このことを反義性を例に考える。反義性とは、語が表す世界における、方向性の対立か、肯定/否定の対立のどちらか (あるいは両方) に基づくものである。この対立が語の意味に明確に反映している場合に、語と語が反義語であると見なされるのである。また、このような反義性を生み出す概念的対立の観点から、反義語を 3 つに分類することができる。1) 方向性の対立に基づくもの (north/south など)、2) 肯定・否定の対立に基づくもの (true/false など)、3) その両方に基づくもの (good/bad など) である。その方向性、肯定・否定の対立のあり方に基づいてさらなる下位分類ができる。

[1] “Toward a Frame-based Lexicon,” *Frames, Fields, and Contrasts*, ed. by A. Lehrer and E. Kittay, Erlbaum.

「動詞の意味はどのように文法に反映されるか？構文分析と語彙テンプレート分析を巡って」

講師 岩田彩志 (大阪市立大学)

動詞にとって syntagmatic な関係とは、動詞とその統語フレームの関係、つまり linking のことになる。Linking を説明するために Pinker (1989[1]) は意味役割でなく X acts on Y のような状況タイプを用いた解決法を提案したが、その後この考え方は Goldberg や Levin の理論に受け継がれている。またそのような「文法に反映される意味」を共有している動詞間の関係こそが paradigmatic な関係であることになる (cf. Levin (1993[2])).

このように Goldberg の構文的分析と Levin の語彙テンプレート分析は同じ流れの延長上に位置づけることが出来るが、両者には幾つか違いも存在する。本発表では、

特に(1)動詞の意味と構文/テンプレートの意味の距離、(2)意味の表示法、の2点について所格交替・二重目的語の事例研究を通してそれぞれの理論の妥当性を検証していく。

[1] *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. [2] *English Verb Classes and Alternations*.

「反語彙主義による動詞統語論」

講師 松本マスミ (大阪教育大学)

反語彙主義(anti-lexicalism)とは、動詞などの語も回帰的統語演算の出力であると考えることによりレキシコンとシンタクスを一元化する試み(藤田・松本 (2005[1])など)である(cf. Harley (1995[2])). 本発表では、反語彙主義の立場から他動性交替の分析において提案されてきた三層 VP 構造仮説における動作主項と原因項の統語的・意味的振る舞いについて、中間構文における主語の責任解釈などから明らかにしていく。また、語彙主義(lexicalism) (cf. 語彙論者 (lexicalist)) の立場との違いを、与格交替における Rappaport Hovav and Levin (2008[3]) による分析などと比較しながら検討する。さらに、アスペクトや文・談話レベルにおける総称性といった意味の側面を本仮説によりとらえる可能性を探る。

[1] 『語彙範疇(1) 動詞』, 研究社. [2] *Subjects, Events and Licensing*. [3] “The English Dative Alternation: The Case for Verb Sensitivity,” *JL* 44.

「移動と状態変化」

講師 米山三明 (成蹊大学)

Goldberg & Jackendoff (2004[1]) は構文の考え方に基づいて結果構文を分析しているが、その中では移動表現も結果構文に含まれるものとして扱われている。このような分析の背景には、空間表現と状態変化表現の間に共通性を見る Jackendoff (1990 [2])などの概念意味論における研究が関係していると思われる。

本発表では、英語において移動表現と結果構文はどのような関係にあるのかとい

う問題について、概念意味論における意味場の考え方を織り交ぜながら検討することにする。たとえば前置詞 *into* は移動表現と結果構文の両方で使われるが、Helen Keller の書いた本の中には *into* の使用に関して興味深い特徴を観察することができる。結果構文についてはこれまでも数多くの先行研究があるが、本発表ではそれとは一味違う分析を提示できればと考えている。

[1] “The English Resultative as a Family of Constructions,” *Lg* 80. [2] *Semantic Structures*, MIT Press.

〈シンポジウム C 室〉 (11 月 16 日午後)

談話と統語のインターフェイス

司会 遠藤喜雄 (神田外語大学)

本シンポジウムでは、統語と談話のインターフェイスを、3 つの異なる視点から考察する。

1 つ目は、近年ヨーロッパを中心に進行中の普遍的な統語構造の地図 (the cartography of syntactic structures) を作成するプロジェクトからの視点で、談話情報が詳細な統語構造の地図でどのように表現されるかを考察する。

2 つ目は、最新のミニマリストプログラムからの視点で、これまでの命題中心の統語研究からは抜け落ちていた談話に関わる統語現象が、CP 領域において表現されるメカニズムを探求する。

3 つ目は、日本における日本語学や国語学の研究からの視点で、日本語学や国語学の研究において得られた談話と統語に関わる豊かな研究成果を見ながら、英語学の研究者が学ぶうる点を探る。

「統語構造地図作成プロジェクトにおける談話情報」

講師 遠藤喜雄 (神田外語大学)

1990 年代後半に Guglielmo Cinque と Luigi Rizzi によって共同で開始され、現在ヨーロッパを中心に進行中のプロジェクトに普遍的な統語構造の地図 (the

cartography of syntactic structures) を作成するプロジェクトがある (cf. Cinque 1999; Rizzi 1997, 2004)。これは、普遍的な統語構造を出来る限り綿密で詳細に描くという趣旨のものである。本発表では、具体例を交えながら、このプロジェクトの概要を見た後で、日本語からどのような貢献が可能であるかを、特にトピックやフォーカスといった CP 領域に属するとされる談話に関わる現象をもとに議論する (cf. Endo 2007)。

[1] Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Head*, OUP. [2] Endo, Y. (2007) *Locality and Information Structure*, John Benjamins. [3] Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left-Periphery," *Elements of Grammar*, ed. by L. Haegeman, Kluwer.

「CP 構造からみた主語と一致現象」

講師 長谷川信子 (神田外語大学)

長谷川 (2007[1])で、CP 構造の観点から言語事象を見ると、これまで IP (命題) 構造では捉えられなかった一般化が可能なことを論じたが、本発表ではそれを発展させ、仁田 (1991[2])などで指摘されている日本語の「特定人称主語と述語・文末形態」の関係も「主語と述語の一致」として分析できること、さらに、述語との一致があれば、主語省略が可能なことを論じ、一般に、空主語構文 (命令文、PRO や pro) は CP 主要部との一致により可能であるとの分析を提示する。談話とつながる主文の CP の機能と構造を整備することで、従属節の現象にも新たな視点が持ち込めることを示したい。

[1] 『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』, ひつじ書房. [2] 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.

「日本語の談話と統語のインターフェイス」

講師 野田尚史 (大阪府立大学)

文レベルで見られる統語現象が談話レベルで変化することを、日本語のヴォイスやテンス、モダリティ、主題などを例にして検討する。

たとえば、日本語では希望を表す「～たい」が主文末に使われる場合、1 人称主語の「私は海外で働きたい。」のような文は自然だが、3 人称主語の「?彼女は海外で働きたい。」のような文は不自然である。

しかし、「海外で働きたい。信一はそう思った。」という談話になれば、「海外で働きたい。」の主語は 1 人称ではなく、3 人称になる。それは、この 2 文の連続が「信一は海外で働きたいと思った。」とほぼ同じあり、「海外で働きたい。」という文が従属節のような働きをしているからである。

このような現象を説明するために、談話を構成する「文」の中に、「独立文」だけでなく、従属節のように独立文に従属している「従属文」があることを主張する。

[1] 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」, 『日本語の文法 4 複文と談話』, 岩波書店.

〈シンポジウム D 室〉 (11 月 16 日午後)

英語構文研究：言語理論とコーパス

司会 深谷輝彦 (椋山女学園大学)

コーパス特に British National Corpus の普及とともに、英語学研究においてコーパスの利用が盛んになりつつある。そうした中で、コーパスを単純に研究者にとって便利な例文集として利用する使い方が時々みられる。本シンポジウムは、大規模コーパスを用いた英語構文研究の実際を紹介し、かつその方法論を議論する。具体的には、英語コーパスから得られる言語事実をその文脈も含めて詳細に見ることが、言語理論にどのような示唆を与えるか、を検討する。続いて、コーパスから有意義な言語学的事実を引き出すには、どのような方法をとるべきか、を提示したい。特に構文研究にとって必要な単語レベルを超えた検索方法の重要性を説く。そうして抽出された大量の言語データに潜む英語の規則性を明らかにするために、統計的処理が必要な場合が多い。コーパス構文研究における統計的分析の有効性を再確認する。

「補部をとる副詞について：周辺部の分析 に役立つ大規模コーパス」

講師 大室剛志(名古屋大学)

Jackendoff (1977), Culicover & Jackendoff (2005)は、副詞は補部をとらないとしている。しかしながら、英語を詳細に観察している小西(編)(1989: 501, 1663)、安藤(2005: 841)などでは、若干の副詞が補部をとるとの見解が示されている。副詞は補部をとらないとした Culicover & Jackendoff (2005)でさえも本人達が著書の地の文において、副詞が補部をとっている文を用いている。Each of the constructions we have considered can be treated **similarly to bare argument ellipsis**, except that the indirectly licensed constituent has more elaborate structure. (Culicover & Jackendoff (2005: 299)) 本発表では、補部をとる副詞は、一般に考えられているよりも実際には多く存在することを大規模コーパスを用いて示し、それらの副詞の統語的意味的分析を行う際に大規模コーパスから得られる言語資料が大いに役立つことを論じる。本発表が辞書の記述に貢献するところがあれば幸いであらう。

「動詞の語彙特性を探る：コーパスデータの量的分析より」

講師 都築雅子(中京大学)

BNC など、大規模コーパスの出現により、生起頻度、共起頻度などを用いた量的分析が可能になった。特に固有の (idiosyncratic) 特徴を示す語彙の特性の考察には威力を発揮する。本発表では、コーパスデータの量的分析が、母語話者の内省など他の証拠と組み合わせられることにより、より信頼性の高い仮説の提案に繋がることを示したい。具体的には wash, sweep など家事行為を表す動詞、cook, bake など料理行為を表す動詞を中心に、語彙特性を探る。前者の動詞は Declerck (1979[1])などで有界的・非有界的特性を併せもつ動詞と論じられている。後者の動詞は影山 (1996[2])などで状態変化を表すか、作成行為を表すかにより、自他交替可能性が異なると論じられてい

る。

[1] “Aspect and the Bounded/Unbounded Distinction,” *Linguistics* 17. [2] 『動詞意味論』, くろしお出版。

「カテゴリー形成、パターン認識と構文」

講師 大名 力(名古屋大学)

本発表では、(a) “*everything from X to Y*” の形式の名詞句 (e.g. *everything from AIDS to high cholesterol*) において、“*from X to Y*” 句が聞き手にカテゴリーを伝達する上で果たす役割を明らかにし、(b) N *after* N 構文 (e.g. *student after student*) において、先行研究で一般に仮定されている、N が同一でなければならないとする制約が破られるケース (e.g. *student after teacher after parent*) を検討することにより、これらの構文の意味解釈や適格性の決定に、人間のカテゴリー形成、パターン認識の能力が大きく関わっていることを示す。また、これらの構文の分析を例に、大規模コーパスの利用が構文研究にどのように寄与するかについても考察する。

[1] Jackendoff, R. (2008) “*Construction After Construction and its Theoretical Challenges*,” *Lg* 84.

「構文研究と統計」

講師 後藤一章(大阪大学)

コーパスに基づく計量学的な分析アプローチは、今や言語研究における重要な一手法として確立されている。特に、品詞解析や統語解析などの技術の発展に伴い、コーパスからの情報抽出の精度は飛躍的に向上し、従来は単語レベルに留まっていた分析が、句や構文といったより高次のレベルにまで波及し始めている。

しかしながら、大量の言語データの機械的な抽出が可能となる一方で、複雑で大規模な多変量データから特徴的な言語事実を発見することは決して容易ではない。そうしたデータを効率的かつ客観的に分析するためには、データ全体の俯瞰的な観察が重要となり、そのために統計学的手法、特に多変量解析の利用が有効となる。

本発表では、統計学的な手法を用い、単語と構文の相互関係を分析する新たなアプローチを提案する。コーパス内に生起する名詞の頻度を V+O などの基本的な構文別に計測し、各名詞間における生起傾向の差異を実証的な観点から検証する。

〈シンポジウム E 室〉(11 月 16 日午後)

アジアの英語受容—現状と展望

司会 奥 聡一郎 (関東学院大学)

日本における英語受容については、英学史研究の伝統を土台として、大谷 (2007[1])、斎藤 (2007[2]) など、英語教育への明確な展望を示した研究があらわれている。一方で、言語政策研究の進展によって多言語多文化主義を背景とした外国語教育論も多く見られるようになった (河原 2008[3])。

本シンポジウムでは、英語受容の現状と展望を日本とアジア諸国の事例から探り、日本における英語のあり方にどのような新しい視点を提供できるか、講師の発表と問題提起から議論を展開していきたい。国際英語や英語帝国主義など英語を取り巻く様々な視点が示されている現在、英語受容に関わる歴史、文化、社会的背景、言語政策、英語教育などを整理していく中で、今後の日本の英語についての展望を共有していきたい。

[1]『日本人にとって英語とは何か』, 大修館書店. [2]『日本人と英語』, 研究社. [3]『小学生に英語を教えるとは?』, めこん出版.

「日本における英語受容」

講師 平賀優子 (慶應義塾大学)

我が国の英語受容の歴史は 1809 年のフェートン号事件に始まる。当初は国防を目的とした英学であったが、それ以後 200 年の間に様々な変化を遂げてきた。そして、2002 年文部科学省が『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を発表したのは記憶に新しい。昨今では「使える (役に立つ) 英語」習得のために、コミュニケーション能力の養成が叫ばれ、英語の音声

面だけが強調されている。「使える英語 (力)」と読み書き能力が切り離されて考えられてもよいのだろうか。

本発表では、日本英語受容史の中でも特に英語教育の目的論 (実用対教養) や、'Practical English' の概念に焦点を当て、日本人にとって「英語が使える」とはどういうことかについて歴史的観点より考察したい。

[1] 平賀優子 (2008) 「日本英語教授法史における Ollendorff の教授法の位置づけ」, 『日本英語教育史研究』23.

「韓国における英語受容」

講師 吉川 寛 (中京大学)

韓国における英語受容については、川合忠仁 (2004[1])、河添恵子 (2005[2]) などが英語教育に焦点をあてた研究を行っている。韓国を早期英語教育の先進国と捉え、日本の英語教育のモデルとなりうるか否かが中心的な論点として取り上げられてきた。

日本と韓国は、共に、ほぼ単一的な言語社会を持ち、鎖国政策を経験し、英語受容の時期的な一致もみられる点などにおいて、英語受容に関して、似通った歴史的・文化的背景を持っている。しかし、英語受容に対する認識は日本と韓国では大きく異なっている。そこには両国の風土や国民性における相違が、深く関与しているといえるであろう。

韓国の英語受容を通時、共時の両面から考察し、国家規模で展開される英語教育政策の方法論と成果の検分を通して、日本の英語教育の方向性を見極める参考とした。

[1]『韓国の英語教育政策—日本の英語教育政策の問題点を探る』, 関西大学出版部. [2]『アジア英語教育最前線』, 三修社.

「シンガポール・フィリピンにおける英語受容」

講師 河原俊昭 (京都光華女子大学)

シンガポールとフィリピンは英米による植民地支配をきっかけとして、英語が根

を下ろし、独自の英語変種(Singlish, Taglish)が生まれた。両国の言語政策だが、シンガポールは、主にマレー人、華人、インド人からなる国であるが、どの民族の母語でもない英語を国家運営の言語として用いてきた。教育の場では、一貫して英語が授業言語として用いられており、若者の英語運用能力は高く、シンガポール人としてのアイデンティティが次第に生まれつつある。一方のフィリピンは、ながらく英語を授業言語として用いてきたが、ナショナリズムの盛んな 60-70 年代を経て、国語と英語による二言語教育制度を取り入れるようになった。現在、国際化の時代を迎えて、英語への関心が再度高まっている。

日本の英語教育界は、これらの英語に代表されるアジア英語（さらには国際英語）にどのように向かいあうべきか、今後その態度を決めていく必要があるだろう。

「日本人と英語」

講師 斎藤兆史（東京大学）

近年、統計的データを根拠としてアジアのなかで日本の英語教育が立ち後れているとする議論が英語行政を動かしている。だが、そのような認識に基づく英語行政改革は、逆に日本人にとって英語教育・学習がどのようなものかという議論をないがしろにしているため、今のところ成功しているとは言い難い。日本の英語受容史をひもとけば、英語はアジアの共通語でもあるのだからしっかり学ばなければならないとの議論は、すでに明治初期に現れていることが分かる。英語を重要な外国語と認識しながら、日本人はなかなかそれを効果的に身に付けることができずにいるのである。その状況は、文法・読解式の授業や受験英語を排すれば改善されるというほど単純なものではない。本シンポジウムでは、アジアにおける英語受容の歴史を踏まえ、日本の英語受容の特殊性を議論したい。

[1] 斎藤兆史 (2007)『日本人と英語』, 研究社。

〈シンポジウム F 室〉(11 月 16 日午後)

機能範疇の創発—通言語的視点から

司会 大沢ふよう（法政大学）

本シンポジウムは言語変化を説明するだけの個別の原理ではなく、普遍文法の一部として、共時的変異や言語獲得をも包摂できるような一般性のある原理は提案できないだろうか、というところから企画され、機能範疇 (F) に関して新しい視点を提案する。まず古い時代の英語に機能範疇は存在せず、新たな機能範疇が出現することで、統語構造が変化していくということを主張する。

さらに、この機能範疇の創発という現象が単に英語だけに見られる現象ではなく、通言語的にも共時的にも関わってくる現象であることを論じる。つまり機能範疇の在り方を柔軟にとらえ、創発という観点を導入することで、英語の歴史変化のみならず、英語以外の言語、日本語やドイツ語において観察される通時的変化や共時的変異などが無理なく説明できるということを見る。また母語獲得にも、この現象が関わっているかもしれないということ、それらが言語の進化という大きな枠組みの中に位置づけられるのではないかということ提起する。

[1] Osawa, F. (2003) “Syntactic Parallels between Ontogeny and Phylogeny,” *Lingua* 113. [2] Radford, A. (2000) “Children in Search of Perfection: Towards a Minimalist Model of Acquisition,” ms.

「英語史における機能範疇の創発—言語における個体発生と系統発生」

講師 大沢ふよう（法政大学）

古英語の初期には機能範疇は存在せず、語彙範疇のみから構成されていたこと、新たな機能範疇の出現が英語の本質を変えていったことを、名詞句の NP から DP への発達を中心にみる。また不定詞節の発達など、他の構造に関しても同様に機能範疇の創発が関与していたことを論じる。

子供の母語の獲得過程（個体発生）は、

機能範疇が時間の経過によって創発してくるメカニズムが働いている点で、言語の史的変化（系統発生）と同じ方向性を示していると提起する。この仮説を支持する事実は幾つかある。上の名詞句の発達以外にも、例えば機能範疇が創発する前の初期多語段階で様々な言語ですでに子供の発話にアスペクトの知識があることを示す現象が観察されているが、初期の印欧語の動詞は時制ではなくアスペクトを表していたこと、現代英語における確立した TP の存在、時制はもたないがアスペクトを表す手段を持つ言語の存在などはその関連性を証拠づけるものである。またアスペクトの本質や、TP との関係についても言及したい。

[1] Osawa, F. (2007) “The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny,” *Nominal Determination*, ed. by Abraham et al. [2] Tsimpli, I-M. (1996) *The Prefunctional Stage of LA*.

「機能範疇パラメータ化再考」

講師 酒井 弘 (広島大学)

1970年代後半以降に原理とパラメータのアプローチが発展するに伴って、言語間の類型論的特徴の相違を、機能範疇の特性に還元しようとする試みが注目されるようになった。「機能範疇パラメータ化仮説」に代表されるこの種の試みは、比較統語論分野のみならず、言語の通時的変化や習得過程を対象とした研究にも少なからぬ影響を及ぼした。しかしその試みの進展に伴って、機能範疇を、統語的相違を説明するツールとすることに対するいくつかの重大な問題が浮かび上がった。本発表では、過去 30 年間の日英比較統語論研究の発展を「名詞句」構造の分析を辿りつつ概観し、文法間の比較において機能範疇の果たす役割に関する問題点を指摘する。そして、問題点を回避して健全に研究を発展させるための方策（ガイドライン）について述べる。このようなガイドラインを設定することは、通時的変化や習得過程の研究においても同様に有効であろう。

[1] Fukui, Naoki. & Sakai, Hiromu (2003) “The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese and Related Issues,” *Lingua* 113.

「ドイツ語における機能範疇について」

講師 保阪靖人 (首都大学東京)

ドイツ語は、基本構造が OV であるとされている。しかしながら、主節においては定動詞が第二位に位置する現象 (V2 現象) が見られる。V2 は、V→T→C という主要部移動によって説明されるのがふつうである。この移動において重要なのは、C である。この文頭の機能範疇 (ここでは FP とする) は、ドイツ語の習得においても重要な役割を果たし、たとえば動詞と主語の一致の習得と、V2 現象は深く結びついていて、F は、I と C の役割を同時に果たしていると言える。この FP は、歴史的に見ても定動詞の移動現象とともに形成されてきたともいえるかもしれない。これに対して、T が存在するという根拠は英語の AUX でまとめられる要素の歴史的变化と比較してもほとんどないといってよい。本発表では、一つの機能範疇が V2 現象を引き起こし、それがドイツ語の特徴となっていることを示すとともに、ドイツ語と英語の統語的違いと深く関連していることを明らかにする。

「機能範疇はなぜ創発したか」

講師 保坂道雄 (日本大学)

機能範疇の創発の要因について、文法化と言語進化の見地から考察を試みたい。Heine & Kuteva (2007[1])及び Van Gelderen (2006[2])を出発点に、言語の初期段階では機能範疇が存在せず、語彙範疇 (N と V) の併合(merge)による階層構造の発現が言語進化にとり重要な契機となったことを見る。次に、V の移動(move)を介在として、形式素性(Q, Top, Focus 等)を内包可能な機能範疇(F)が創発したことを論ずる。またこうした変化が機能的要因(疑問化、話題化、焦点化等)により駆動された主節現象として始まり、後に従属構造の発達に繋がるこ

とを見る。なお、具体的な事象として、ゲルマン語における CP の発達を取り上げる。特に、古英語の subordinating particle である *þe* と *þæt* を中心に、英語における補文標識の発達について考察する。また、時間の許す範囲で、こうした機能範疇創発の観点から、日本語の CP の存在についても言及したい。

[1] *The Genesis of Grammar*, OUP. [2] “Economy of Merge and Grammaticalization: Two steps in the Evolution of Language,” ms.

2008年9月1日発行

編集・発行 日本英語学会

代表者 原口庄輔

発行所 日本英語学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/elsj/>

〒113-0023

東京都文京区向丘 1-5-2

開拓社内

電話 (03) 5842-8900

印刷所 アーク印刷株式会社

©日本英語学会 2008

2008 年度会費未納の方へ

会費未納の方は、学会支援機構から送られました振込用紙で納入して下さいますようお願いいたします。2年間滞納されますと、会員規定第3条第4項により自動的に退会扱いとなりますので、ご注意下さい。

学生会員の方へ

学生会員登録は継続手続きが必要です。指定された期日までに手続きをなさらないと通常会員として会費請求されます。手続きの仕方は学会ホームページをご覧ください。

2008 年 9 月 1 日
日本英語学会事務局